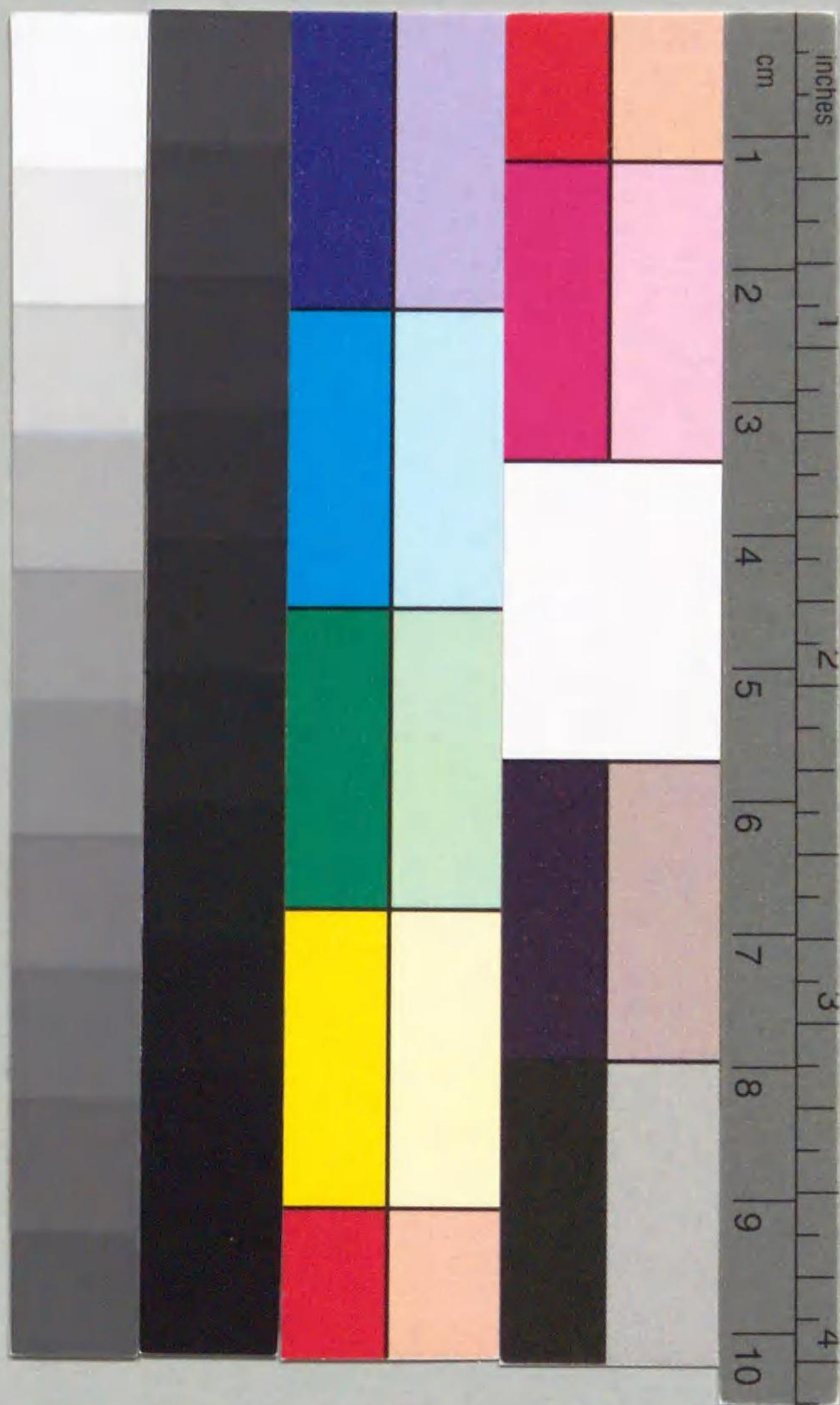


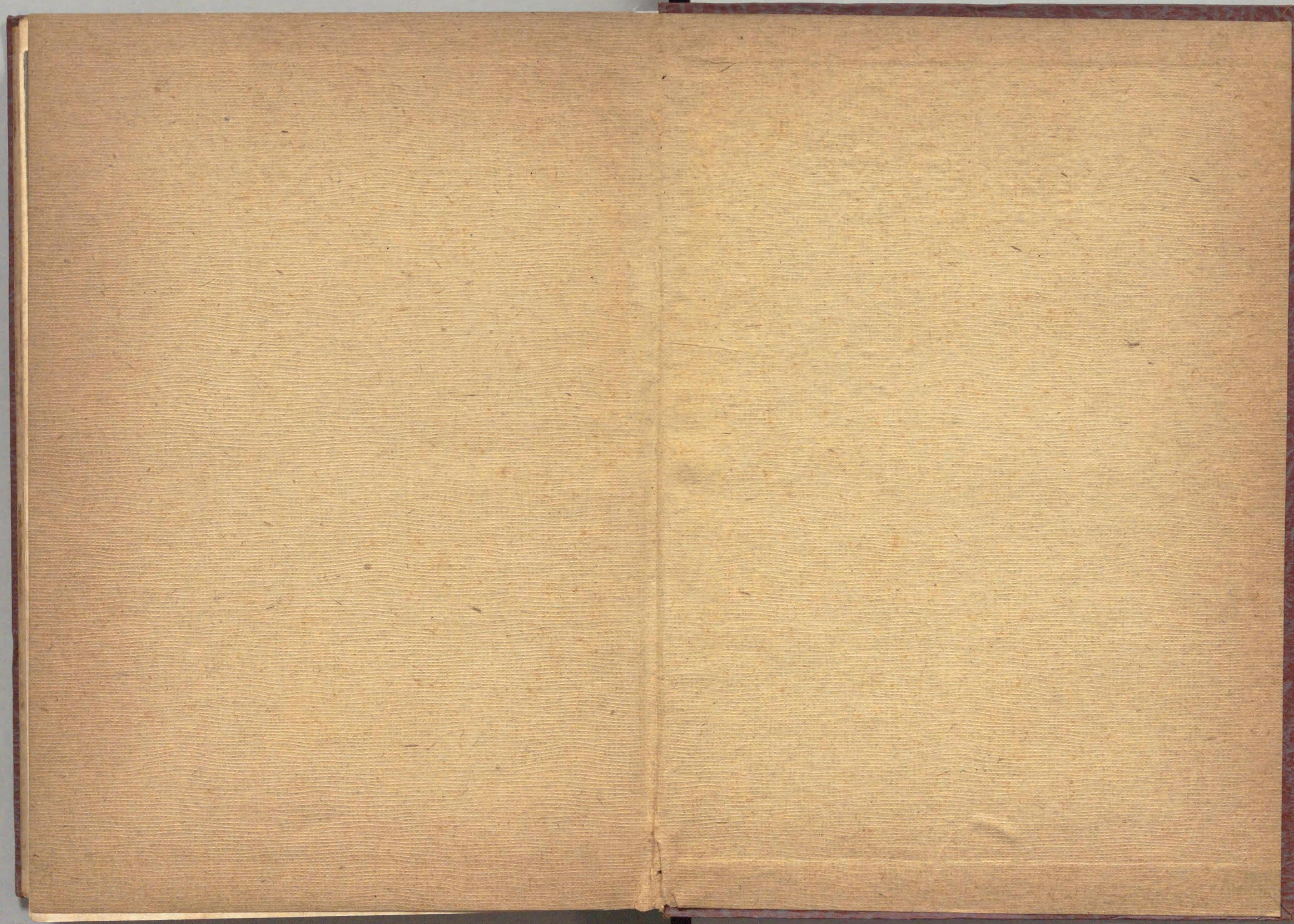
KH562-H1



1200701540802

新版 茶話全集 下卷





茶話全集 新版

卷下

薄田泣堇 著

創元社 版

KH562-H1

目次

結婚司會に夫婦喧嘩を説く	三
巴里の安料理	六
料理屋はその一つ	一〇
實業家の義太夫	一四
義太夫を呼べ	一八
呂昇の浪花節	二二
新聞の購讀中止	二六
硯と殿様	三〇
古松研	三四
英雄の鬪鬪	三八
性 山	四二
性 愁	四六

目次



I 種
W



1200701540802

KH552-H1

目次

女の手の.....三

女を賢くする法.....三

口は調法.....三

俘虜研究.....四

天才.....四

虱.....四

狐と狸.....四

酒.....四

床柱.....五

鬼.....五

お湯嫌ひ.....五

どくだみ.....五

油が足りない.....五

幽霊.....六

鐵扇.....六

涙.....六

目次

俳優の家.....七

果物の.....七

胃の腑.....七

女と薪.....七

洋傘.....七

道成寺の石段.....七

女博士.....八

臺灣と考へ事.....八

苜蓿.....八

蜜蜂.....八

魔法使.....八

食物と格言.....八

新畫.....八

佛畫.....九

綠青.....九

天井畫.....九

畫家と商人 九五

畫家と書物 九七

馬車の葬式 九七

呂昇の咽喉 一〇〇

雷 一〇一

京の水 一〇三

親 一〇五

玄關 一〇七

墓石 一〇八

風藥 一一〇

賽錢百兩 一一一

狸 一一四

節用集を食ふ 一二六

角田川 一二八

もつと善い物 一三〇

鰻の畫 一三三

畫の催促 一三五

長命の祕訣 一三七

隈侯の進物 一四〇

就職口 一四一

象山と江川 一四五

鼻 一四七

火も亦涼しい 一四九

悪戯小僧 一五二

黒ん坊の教會 一五三

物識り娘 一五八

馬具屋 一六一

水神へ供物 一五三

珍書 一五五

越路の「山科」 一五七

帽子 一六〇

無識の得 一六三

若芽薑 一六四

大食俳優 一六七

生食 一六九

小包の紐 一七一

四國猿 一七三

光琳の羽織 一七五

儉約人 一七七

畫の交換 一七九

落書 一八一

大統領夫人 一八三

旅錢代用 一八五

主人と番頭 一八六

茶匙 一八八

タフトと子供 一九〇

女の辛抱 一九二

金ぴか革 一九五

大雅の拍子木 一九七

狂人 一九九

鼠の貿易 二〇一

畫家と名妓 二〇三

米人のお國自慢 二〇六

袂に珠數 二〇八

子福者の歌姫 二一〇

雷神とお茶 二一二

名士と好物 二一四

切手蒐集家 二一五

俳優の盗み 二一八

教育家氣質 二一九

牧師の杖 二二三

指畫 二三四

ピアノの前 二三五

土を圓めて 二三七

難船した人……………三六

選舉人……………三〇

支那の活動寫眞……………三三

獨木舟……………三四

狂人になる書物……………三五

子供……………三七

佛語通……………三八

墓の中……………三九

是眞の啖呵……………四〇

肉饅頭……………四一

王羲之と扇賣り……………四二

原稿集め……………四三

著書の無心……………四四

武器としての謡曲……………四五

利休の夫婦喧嘩……………四六

句讀點……………四七

葵の上……………三〇

鞞選み……………三一

片腕……………三二

山葵……………三三

天國……………三四

細君選擇法……………三五

音樂通……………三六

馬の目潰し……………三七

玉蜀黍……………三八

鵝……………三九

幽靈の芝居見……………四〇

京都と偉人……………四一

賭博家……………四二

食卓語……………四三

茶人……………四四

臆病な象……………四五

伍廷芳の皮肉 二九四

懸賞短篇小説 二九五

高 塔 二九七

臍無し男 三〇〇

襟 飾 三〇三

缺 皿 三〇五

リンカンの冗談 三〇七

髭の有無 三〇八

三十一文字 三一一

道 樂 三二三

懶・巧 者 三二五

三人畫家 三二七

新聞記者となる法 三三〇

肥 大 婦 三三三

皮肉な子供 三三四

飛 青 磁 三三六

明恵と解脫 三三八

穿き違ひ 三三〇

國旗に接吻 三三一

吸 ひ 殻 三三五

國務卿祕藏の聖書 三三八

文豪の顰つ面 三四〇

觀樹老の嘘 三四二

蠟 マツチ 三四五

新近江八景 三四七

捕虜を景品に 三四九

偽 書 三五一

靴の修繕 三五四

七十二歳の下士官 三五七

帽 子 三六〇

無題二つ 三六二

菓子を舐め過ぎて 三六四

武部源藏の裔……………三六
 花の香氣……………三八
 齒と愛國と……………三〇
 女の頤鬚……………三七
 居士と大姉……………三四
 學校長……………三六
 米隱し……………三九
 馬を煽ぐ女……………三三
 溫室……………三四
 地獄の住民……………三六
 汗……………三八
 佛國領事……………三〇
 吝ん坊……………三三
 勇智仁……………三五
 豆本その他……………三七
 狸と猿……………三九

豆猿……………四〇
 貧民視察……………四一
 二十五仙……………四四
 白髮……………四八
 鴈治郎のお上手……………四〇
 獨帝の進物……………四三
 酒造禁止法案……………四六
 婦人と運轉手……………四八
 歌の師匠……………四一〇
 海洋自由問題……………四三
 鏡……………四六
 獵自慢……………四八
 璃寬襲名……………四〇
 價……………四三
 染め犬……………四七
 堪忍といふ事……………四〇

漱石氏の皮肉	四四五
雞小舎	四四七
頬ひげ	四五〇
婦人	四五二
厄介な訪問客	四五四
一流か三流か	四五五
珍草	四五七
お世辭	四五九
蜘蛛	四六〇
狂人と辯護士	四六一
つんぽ	四六二
命令法	四六三
金曜日	四六四
女優と花束	四六五
安息日	四六六
衝突豫防法	四六七

この世で	四六六
蚊と象	四七〇
使分け	四七一
一食主義	四七二
胡桃	四七三
無作法	四七五
重役氣質	四七七
いちご畑	四七九
雞	四八一
物知らず	四八二
磁石よりも	四八四
無差別	四八五
辯護士と俳優	四八六
女學者	四八八
詭言	四八九
女の見わけ	四九〇

煙草盆	四九二
手紙	四九四
齒醫者	四九五
支那問題	四九六
爪	四九八
赤	四九九
蛇	四九九
島	五〇〇
花心に住む	五〇一
毛皮	五〇二
おしこめ	五〇三
句讀點	五〇四
女帽子の針	五〇五
匿名の作	五〇六
對敵行動	五〇八
間違ひ	五二〇

S T A R	五二二
三頭の驢馬	五二三
沙翁	五二五
鰐	五二六
閑	五二八
枕	五二九
内談洩れ	五三〇
盗まれぬやうに	五三三
女流音楽家	五三九
演説つかひ	五三二
名前前	五三三
返辭	五三六
慈善家	五三九
誤植	五四一
救濟	五四二
良人改造	五四三

新版茶話全集 下

目次

マッチの火	五四
左	五四
暗	五七

結婚司會に夫婦喧嘩を説く

夫結婚は葬式と同じやうに、色々儀式があつて、その選擇は自由である。ここに千葉の片田舎に、Bといふ若い男があつて、ある娘と相思の仲となつた。で、非常に勇氣を奮つて（結婚には人殺しをするのと同じやうに非常な勇氣が要る。何故かと言つて結婚といふものは、事によると、自分をも殺し、また相手方をも殺し兼ねないものであるから。）結婚しようといふことになつた。

ところが、結婚式をどんな風にしたのか、Bとしては一向いい考へが頭に浮んで來なかつた。幸ひBは文學者のT氏を非常に崇拜してゐるところから、T氏に頼んで式をやつて貰ふ事にした。

場所は東京丸の内の中央俱樂部だつた。新郎新婦とその親戚友人たちの顔が揃ふと、T氏

は洋服姿の夫人と連れ立つて、ずつと席の真中に押し進んだ。そしていつもの飾つ氣のないぶつきらぼうな調子でお説教を始めた。

「皆さん、ほんたうの平和は争ひの後でなくちや得られません。歐羅巴も今度の物凄い戦争を経て、初めて眞の平和に近い平和が得られさうになつてきました。夫婦の仲もこれと同じです。」

T氏は、じつとさしうつ向いてゐる花婿花嫁の顔を見た。二人は酸漿のやうに赤くなつてゐた。

「だから、あなた方にお勧めする。どうか精々夫婦喧嘩をなさい。喧嘩をしないと、どんな夫婦だつて相手方のほんたうの氣心が知れよう筈がありません、どうぞ思ひ切つて喧嘩をなさい。私達もこれで今日まで随分喧嘩をしたものです。何事も喧嘩ですよ。喧嘩です。」

T氏はかう言つてちよつと言葉を切つた。

そこに居合はす人達は互ひに顔を見合はした。この人達はこれまで幾度かめでたい結婚式に顔を出したが、いつもめでたい事ばかり聞かされてゐたので、何だかだしぬけに、薪雜棒

で後からどやしつけられたやうな氣持がしたに相違ない。

皆がおし黙つてゐるのを見ると、T氏はきつと花婿花嫁の顔をみつめた。そして腹一杯の聲を張り上げて叫んだ。

「それでは今日からこのお二人を夫婦と認めます。」

かう言つたかと思ふと、夫人と一緒に席を立つて、つかつかともとの席にかへつた。

皆は呆氣にとられた。變な結婚式もあればあるものだと思つたやうな顔をした。

「變ですね。」

「どうも少し變つてゐるやうです。」

「少しどころぢやありませんよ、あまり變り過ぎてゐます。」

かういふ囁きがそこらからひそひそと起つた。すると、花嫁のすぐ隣に並んでゐたその父親は、その時までじつと手を拱いて考へ込んでゐたが、急に顔を上げて自分の女房を見た。

「どうも感心しちまいました。いや全く感心しましたよ。ね、お前だつてさうだらう。」

「ほんとにさうですわね。」

花嫁のお母さんはかう言つて、心から感心したやうにほつと溜息をついた。
長年の間いさかひ口争を仕續けて、やつと鍛くちやなこの頃になつて、どうかかうか平和らしいものを初めて味はつたやうな溜息であつた。

巴里の安料理

少し話は舊いが、前代議士のO氏が、媾和全權大使西園寺侯のお供をして、巴里へ行つてゐた時の事、氏は何でも一ぱしの巴里通にならうとして、いろんな所へ出入をした。そして人の知らない間に、こつそりといろんなことを覺えたものだ。

ある日の事、O氏は同行の公爵K氏に言つた。

「Kさん、かう時勢が變つて、物事がすべて民主的になつて來ては、貴方なども今迄通りのお公家さんではなかなか通られませんかよ。」O氏はかう言つて、日本中の平民の代表者のや

うな民主的な顔をした。民主的な顔といふのは猿のやうな表情をする事なのだ。「かうなつたからには、下々のする事は、何でも見ておく事ですよ。ついでには一ツいい所へ御案内しませうか。」

「ありがたう、いい所つて一體何處なんですか。」

K公爵は繊細な手で襟飾を直しながら訊いた。

「安料理屋なんですよ。まあ、日本で言つたら繩暖簾といふ所でせう。」O氏はそんな所までも知りぬいてゐるのが自慢らしかつた。「それでゐて、うまく喰はせる事にかけたら、巴里一流のホテルや、料理屋も裸足はだしといつた所ださうですよ。」

「へえ、そんな所があるんですか。ぢや、連れてつて戴きませう。」

公爵にしても、うまくて、おまけに値段の安い料理が嫌ひでない點にかけては、O氏同様民主的であつた。

二人はオテル・ブリストルの旅館を出た。飲食するには勿體ないやうな日和で、プラス・ヴァンドームの廣つ場には、ナポレオンの像が平民のやうな顔をしてにこにこしてゐた。二

人は細い路次に折れて、すぐ右側の小料理屋に入つて行つた。

「ここですよ、レストラン・ボアソンと言つてね。」O氏は給仕から受取つた獻立をお公家さんに見せながら言つた。「御覽なさい。ビステキが50と書いてある。今時50サンチム（一サンチムは四厘弱）のビステキは安いぢやありませんか。」

「50サンチムのビステキ！ ほんたうに安いですね。」若い公爵は感心したらしく首をふつた。

二人は鱈腹飲んだり食つたりした。そして勘定書をとつてみた。勘定書には三百七十五フランと書いてあつた。O氏は眼を白黒させた。

「三百七十五フラン！ どうしたんだらう、勘定違ひではないでせうか。」

「ええつ。三百七十五フランですつて。」若いお公家さんは卓子の向うから勘定書を覗きこんで考へた。

「してみると、50とあるのは、サンチムぢやなくて、フランですよ、吃度。」

「フランでせうか。驚いたなあ、それではちつとも廉かない。」

O氏は酔も何も一時に醒めたやうな顔をした。

「Kさん、甚だ相済みませんが、三百フランばかりお持合せでせうか。」

「あいにく持合せがないんです、實はお廉いやうにうかがつたものですから。」

公爵は恥づかしさうに言つた。實際その日に限つて若いお公家さんの懐中物は、O氏と同様最も民主的に瘠せきつてゐた。

二人は早速オテル・プリストルの全權本部に電話をかけて、仲間の某氏に金を持つて来るやうに頼んだ。二人は給仕の目つきを気にしながら、一杯の飲料をちびりちびり小鳥のやうな口許をして舐めつづけてゐた。飲料がなくなつた頃にやつと金がとどいた。

二人は外へ出て、一緒にほつと溜息をついた。見ると、プラス・ヴァンドームの廣つ場は、ナポレオンの像が金持の次男のやうな顔をしてにやにや笑つてゐた。二人は顔を見合はして又一つふかい溜息をついた。

それ以後O氏は友達と散歩の途すがら、どうかしてレストラン・ボアソンの前へ出ると、慌てて友達の肱をつついて言つた。「君、此處は怖い家だよ、滅多に入るんぢやないよ。」

料理屋はその一つ

早稻田系統の實業家、日清生命のT氏と、藤本銀行のI氏とが、こなひだ京都で會つた事があつた。二人は夕飯を食べに、祇園の安井神社の境内にある「つるや」の支店に入つて行つた。

二人は座敷に案内せられると、京都には久しい以前早稲田で自分達を教へてくれた文學博士F氏がゐる事を思ひ出した。すべて師匠といふものは、その傍を離れると、えて忘れられがちなもので、思ひ出す時分には、大抵その人は亡くなつてゐるものだが、この場合F氏が生きてびんぴんしてゐるのは、とんだ幸福だつた。何故といつて、二人は早速手紙を書いてF氏を「つるや」へ招待することに取決めたのだから。

I氏は手紙を書いた。届先は文科大學のF氏宛にして、こちらは安井神社境内の「つる

や」として置いた。——手紙を出すと、二人は待つ間の退屈しのぎに、雲行きの怪しい今の財界の模様など話しつづけた。

いくら二人が話し合つても、この不景氣をどうする事も出来なかつた。で、二人は戀の話をしようとした。ところが、困つたことには、二人とも煙草を喫してゐた。一體煙草といふものは戀の墓場の煙と言はれるもので、戀をするものは決して煙草など喫さない。煙草好きに限つて、眞剣な戀など出来つことはないものだ。二人が戀を語つたつもりで、實は女の噂をしてゐたに過ぎなかつたと氣がついた頃には、二人ともかなり腹が空いてゐた。——だが、肝腎のF氏はまだ姿を見せなかつた。

「先生は遅いね。」

「うん、遅い。どうしたんだらう。」

「腹が空いた。そろそろ酒でも始めて待つことにしようか。」

「よからう。」

二人は早速酒を取寄せて、ちびりちびりと盃の縁を嘗めてゐた。そして幾本か空の銚子が

膳の前に並んだ頃、F氏が汗を拭き拭き、やつと座敷に入つて来た。「や、どうも遅くなりました。」

倫理學者はソクラテス以來の道德説が一ぱい詰つてゐる頭を下げた。

「ちよつと寄り道をしたものですから。」

「さあどうぞ。」I氏は座蒲團を博士の方へ押しやつた。「寄り道つて、どちらへですか。」

「え。ちよつとその……」F氏は何か思ひ出したらしくにやにや笑つてゐた。

「ちよつと、どうなさいました。」

すると博士は聲を立てて笑ひ出した。そして二人が嚴重に祕密を守つてくれるなら、來遅れた理由を打明けてもよいと言ひ出した。二人は祕密を守ることを約束した。

F氏は持前の東北辯で話し出した。それによると、氏は招き状の裏に書いてあつた安井神社の境内まで來は來たが、どうしても肝腎の料理屋が見出せなかつた。丁度折よくそこを頭の圓い坊さんが通り掛つたので、F氏はその人の前に頭を下げた。

「ちよつと伺ひますが、この邊に門百屋といふ料理屋はございますまいか。」

「門百屋？」坊さんはつるりと頭を撫でた。「はてな、ねつからこの邊にはおへんやうどすな。」

F氏はうろたへ出した。そして行き合ふ人をつかまへては「門百屋」の在所を訊いたが、誰一人知つてゐるものはなかつた。そこへ折よく學校歸りの小娘が通り掛つたので、この大學教授は又しても「門百屋」の在所を訊いた。

「門百屋はん？ そないな家はおへんが。」小娘は可愛らしい眼を上げて汗で濡れた博士の顔を見た。「どないな字を書きまんねん。」

博士は早速持合せた洋杖で地面に、招き状にある通りの文字を書いた。

「ああ、つるやどすか。」小娘は小鳥のやうに笑ひ出した。「つるやはんならそことどすかな。」

博士は娘つ子に教へられて、やつと「つるや」に辿りついたといふのだつた。

博士は尊敬すべき哲學者である。ハムレット曰く「ホレシオよ、この天地の間には汝そなたの哲學の思ひも及ばぬ大事がござるぞ。」——ほんたうに大事は幾つもござる。少くとも料理屋はその一つだて。

實業家の義太夫

東京の實業家S氏の令嬢が、大阪の實業家M氏の孫息子、今は大藏省の役人を勤めてゐるY氏に嫁いだことは、新聞の花嫁花婿欄に氣を付けてゐる人の、誰しも記憶してゐることだらう。

その披露の宴に、S氏は遙々大阪までやつて來た。M家では花嫁の父親として叮嚀に待遇をした。M氏は火災保險會社や、銀行の取締役として聞えてゐると同時に、能樂や義太夫の達者としても、相應に名を賣つてゐる人である。大きい聲では言へないが、S氏も義太夫にかけては、天狗の一人である。

宴席には、色々餘興もあるので、いつもM氏の絃をつとめる三味線弾きの某がやつて來てゐた。M氏は豫てS氏が義太夫好きな事を聞いてゐたので、別室にその三味線弾きを呼んで

そつと小聲で囁いた。

「今二階に、東京からSさんといふ人が來て居られるが、至つて淨瑠璃好きで、餘興に一つお願いしたいと思つてゐるのだから、お前ちよつと上つて行つて、絃を合せて來てお呉れませんか。」

三味線弾きは二つ返事で、三味線を抱へて氣輕に二階へ上つて行つた。暫くすると絃の音がぼつんぼつんと續いたり止んだりしてゐたが、いつとなくそれが止つたかと思ふと、泣き出しさうな顔をして三味線弾きが下りてきた。

「旦那はん、」三味線弾きはM氏の顔を見て悲しさうに言つた。「勘忍しとくなはれ、あの方の絃を弾くのだけは。私どうも堪りまへんよつてな。」

M氏は不思議さうに聞いた。

「堪らんで、一體どうしたんだい。」

「淨瑠璃好きや言ひなはるから、ちつとは語られるのかと思つてましたんやが。」

三味線弾きは可笑しさと悲しさとがごつちやになつたやうな變な表情をした。

「まるでわやだんがな。あんな事やつたら、淨瑠璃も何もあらしまへん。絃に合ふ筈がおまへんやないか。」

「さうか。」M氏は急に可笑しさが込み上げて来るのを、會社の重役の技倆で、やつと奥齒の邊で嚙み殺した。そしてわざと蟹のやうな嚴つゝい顔をした。

「そんな氣儘を言ふものぢやない、あの人は東京では名代の義太夫道樂なんだから。」

「そら知つてまんねやけど、とてもわての手にはおへまへん。」

三味線弾きは涙ぐんだ目つきをして言つた。

「それぢや困る。あの方はお前も知つてる通り、孫の花嫁のお父さんだ。家にとつては大事な客なんだから。そこを何とかうまくやつて呉れないぢや困るぢやないか。」

M氏は押し宥めるやうな調子で言つた。

三味線弾きは暫く考へてゐたが、やがて決死の色を顔に浮べて立ち上つた。

「よろしおま。そないな譯やつたら、兎も角もやつてみまつさ。」

暫くすると、二階ではまたもぼつんぼつんと變な三味線の調子が聞え出した。

宴席が開かれると、餘興として當日の花嫁のお父さんS氏の義太夫が披露せられた。皆は手を拍つて喜んだ。袴姿のS氏は三味線弾きをつれて別室から頭を下げた。暫くすると、義太夫が始まつた。始まると直ぐに、皆は呆氣にとられた。

「どうも變な義太夫だんな。」

「さうだつせなあ、まるで牛が吼えるやうやおまへんか。」

「まあ、黙つて聞きなはれ。だんだん變になつて來ますよつてなあ。」

「わて、もうかなひまへん。」

たうとう居合はす客の一人は、聲を出して嘖き出してしまつた。するとそれにつれて、皆が一度に聲を揃へて笑ひ出した。

M氏も笑つた。花婿も笑つた。花嫁も笑つた。盃も笑つた。銚子も笑つた。最後にS氏も顔をへし曲げるやうにしてお附合ひに少し笑つた。

たつた一人三味線弾きだけは、眞青な顔をして少しも笑はなかつた。

義太夫を呼べ

専門學校昇格問題でこえた文部大臣N氏が、ある時、知合の二三人に誘はれて廊に行つたことがあつた。

「酒が始まると、知合の一人が盃をN氏に差しながら言つた。

「なんだか藝妓ばかりでは座敷がしみていかん。義太夫を呼ばうぢやありませんか。」

「義太夫か。」N氏は盃を受けながら大きく頷をしゃくつた。「そいつは面白からう。早速呼んでくれ給へ。」

狸好きのN氏が狸のやうに腹を撫でていつもの大笑ひをする頃になると、そこへ年増の女義太夫がすつと入つて來た。そして太棹の調子を合しながら、骨つばい顔を歪めて一くさり「酒屋」を語つた。

皆は感心したやうに手を拍つて喜んだ。N氏も皆の後から急に思ひ出したやうに、手を拍つて感心した。女義太夫は面目を施して引下つた。

それからまた一しきり酒がはずんだ。暫くするとN氏は直ぐ側に居る主人側の一人を突つた。

「君、義太夫は遅いね、まだ來ないのかしら。」

「義太夫？」突かれた男は不思議さうな顔をしてN氏を見た。「義太夫はもう來たぢやありませんか。」

「もう來たつて？ なあにまだ來やしないさ。」

N氏は胡麻鹽の頭をふつた。相手はN氏をすつかり酔拂つたのだと思つたらしく、わざと宥めるやうに言つた。

「來ましたよ、さつき太棹の彈き語りをして歸つた女があつたぢやありませんか。」

N氏は俯に落ちなささうに狸のやうな表情をした。

「あれは君淨瑠璃ぢやないか。義太夫はまだ來やしないよ。」

「皆は呆氣に取られた。酔つた眼を二ばいに見張りながら、じつとN氏の顔を見つめたが、つい氣の毒になつたので同じやうな事を言つて調子を合した。」

「ほんたうにさう言へば、義太夫はまだ來ないやうですね。」

「それ見給へ、まだ來やしないんだよ。おい、誰か早く義太夫を呼ばないか。」N氏は圖に乗つて得意さうに大きく喚いたが、そこに居合はせた人達は、みんな可笑しさと悲しさとのごつちやになつたやうな表情をして、誰一人義太夫を呼びに立たうともしなかつた。

呂昇の浪花節

今はD大學總長のE氏が、まだH教會の牧師をしてゐた頃、教會員が打寄つて親睦會を開かうといふ事になつた。

羊のやうにおとなしい、そして羊のやうに群つてゐる耶蘇教の信者達だ。親睦會を開くに

しても成るべく天國に近いやうな場所を選ばねばならなかつた。それには丁度恰好なところがあつた。それは書肆K社の主人F氏の大森にある別邸だつた。そこには鳩が飼つてあつたので、少し安價だつたが、天國らしい氣持がしないこともなかつた。

餘興には何がよからうといふ事になつた。世俗を嫌ふ耶蘇教信者も、やはり餘興は人並みに面白かつた。色々詮議の末が、その頃有樂座に來てゐた豊竹呂昇の淨瑠璃を聴くことになつた。——呂昇は藝人ではあるが、熱心な基督信者である。

呂昇は「堀川」を語つた。居合はせた信者達は、四福音書の中で、悪魔が尻から入つた豚が、そのまま海に溺れて死んだ話は聞いてゐるが、與次郎の飼つてゐる猿さるきちが、お初徳兵衛の祝言をするやうなめでたい事はあまり知らなかつたので、みんな手を拍つて感心した。すると顎鬚の長いE氏の後に坐つて、肩越しに伸び上り、伸び上り、呂昇に見惚れ聞き惚れてゐた或る女傳道師が、少し腑に落ちなささうな顔をしてそつとE氏に訊いた。

「先生、あれは何とおつしやるお方？」

「あれですか、」E氏は神のしろしめす世界のことだつたら、何一つ知らないことはないや

うな自信のある調子で答へた。「あれが豊竹呂昇です。」
女傳道師は感心したやうに深い溜息をついた。

「そして、あれが浪花節といふものなんですか？」
E氏は禿頭に荊の冠を被せられたやうな痛さうな顔をした。しかし露骨むきつげにあれが淨瑠璃だとも言ひ兼ねて、少し砂糖に水を混ぜて返事をすることにした。
「浪花節？ いや、さうでもないが、まあ似たやうなものですよ。」

新聞の購讀中止

數多い新聞雑誌の讀者の中には、新聞雑誌を自分一人のために出來てゐるものと信じて、少しでも自分に面白くない、もしくは關係の薄い記事を見ると、直ぐ蟹のやうにぶつぶつ眩き出す者がある。

米國で聞えた新聞紙紐育トリビュンの創立者ホオレス・グレイリイは、優れた新聞記者の多い米國でも、とりわけ優れた記者として聞えた男だが、ある日政府筋の役人に會ふと、その役人はいつにないしかつべらしい顔をして言つた。

「グレイリイ君、君にはお氣の毒だが、僕は今日限り君とこの新聞を禁めたよ。どうも社説の議論が氣に喰はないもんだからね。」

「さうか、それは困つたな。」新聞記者はちよつと驚いたやうな表情をした。「だが、仕方がない。社説が氣に觸つたと言ふなら。」

その翌日グレイリイはまたその役人に會つた。新聞記者は言つた。
「君は昨日僕とこの新聞を禁めたと言つてゐたつけね。」

役人は得意さうに煙をすうと吹いた。
「さうだ、確かにさう言つたよ。」

新聞記者は腑に落ちなささうな顔をした。
「でも、不思議な事もあればあるもんだね。僕は今ここへ來がけに、社に寄つてみたんだが、

いつもの通り機械も動いてゐるし、社員もせつせと働いてたよ。君が禁めたつていふのに、随分をかしいぢやないか。」

役人は慌てて手をふつた。

「君それは違ふ、ひどい違ひだよ。僕が禁めたといふのは、新聞の発行をぢやないんだ。唯購讀を止めたといふに過ぎないんだ。」

「え、購讀を止めた事なのか。」新聞記者はわざと驚いたやうな素振りをしてみせた。「何だ、馬鹿々々しい。君一人が購讀を止したくらゐで、それで新聞の記事をどうかしようなんて、そんな大それた考へは持たない方がいいんだよ。新聞は君ひとりのために出來てるもんぢやないんだからね。」

硯と殿様

犬養木堂の「硯の話」(大阪毎日所載)は、あの人の外交談や政治談よりはすつと有益だ。

——その硯については面白い話がある。徳川末期に鶴笑道人といふ印刻家があつた。硯の善いのを澤山持合せてゐたが、その一つの蓋に大雅堂の筆で「天然硯」と書いたのがあつた。阿波の藩主がそれを見て、自分の祕藏の研七枚までも出すから、取替へては呉れまいかとの交渉があつたが、鶴笑はなかなか承知しなかつた。

呉れぬ物がなほ欲しくなるのは、大名や子供の持つてゐる性分で、阿波の藩主は、望みとあらば何でも呉れてやらうから、たつて「天然硯」を譲つて貰ひたいとしつこく持ちかけて來た。鶴笑はちよつと顔を顰めた。

「それでは代りに阿波の國半分だけを戴く事にいたしませう。」と切り出した。鶴笑の積りでは、それでも大分見切つた土の申出らしかつた。何故といつて阿波の國は半分割いたところで別段差支もなかつたが、硯だけは半分に割つてはどうする事も出來なかつた。あの内閣や政黨を毀す事の好きな木堂ですら、硯の「鋒」を見るためには硝酸銀で焼かなければならぬ。そんな勿體ない事が出来るものではないと言つてゐるくら

るだから。

だが、勘定高い藩主はそれを聞くと、
「仕方がない、この硯と鳴門の瀬戸は俺の力にも及ばぬものと見えるて。」
と、溜息をついてあきらめた。藩主がこの場合鳴門の瀬戸を思ひ出したのは賢い方法で、人間の力で自由にならないものは澤山あるのだから、その中からどんな物を引合ひに出さうと自分の勝手である。かうして斷念がつけば、そんな廉價な事は無い筈だ。

古松研

曩に硯と阿波侯についての話を書いたが、姫路藩にも硯について逸話が一つある。藩の家老職に河合寸翁といふ男があつて、頼山陽と硯とが大好きなので聞えてゐた。

頼山陽を硯に比べたら、あの通りの慷慨家だけに、ぶりぶり憤り出すかも知れないが、實

際の事を言ふと、河合翁は山陽よりもまだ硯の方が好きだつたらしい。で、珍しい硯を百面以上も集めて、百硯簞笥といつて凝つた簞笥にしまひ込んでゐた。

同じ藩に松平太夫といふ幕府の御附家老があつて、これはまた「古松研」といふ紫砂端溪の素晴らしい名硯を持合せてゐた。なんでも此の硯一つで河合家の百硯に對抗するといふ代物で、山陽の褒めちぎつた箱書さへ添はつてゐるので、硯好きの河合はいい機會があつたらどうかして自分の方に捲き上げたいものだ、始終思つてゐた。

ある日河合と松平とは、例のやうに碁を打つてゐた。河合はわざと一二番負けて置いて、それからそろそろ、

「どうも今日は厭に負が込む。こんな日には賭碁でもしたら氣が引立つかも知れない。どうだい、貴公には古松研、拙者には沈南蘋の名畫があるが、あれを一つ賭けてみようぢやないか。」

と切り出して見た。

松平は二つ返事で承知をした。

「お氣の毒だが、沈南蘋は拙者がいただくかな。」

などと冗談をとり交しながら、また打ち直したが、河合は手もなく松平を負かして、名高い「古松研」はたうとうその手に渡つてしまつた。

維新後河合家の名硯は、それぞれ百硯簞笥から飛び出して、知らぬ人を買ひ取られて行つた。大阪の八田氏の賣立會に出てゐた「金星銀絲硯」なども其の一つだが、例の「古松研」は今は神戸の某實業家の手に入つてゐる。

英雄の髑髏

清教徒の英雄オリヴァ・クロムエルの髑髏は、オックスフォード大學の圖書館に珍藏せられて世界に名高いものだが、その後メエラント附近の牧師キルキンソンが発見したものが、今一つ倫敦の考古學博物館に納まつてゐる。つまり頭をたつた一つしかもたなかつた英雄に

髑髏が二つ出た事になるのだ。

政治家や實業家には「良心」を、詩人や音楽家には「心臓」を幾つも持合せて、それを自慢にしてゐるのがある。その事を思ふと、クロムエルの髑髏が二つ出たところで格別差支はない。或はもつと搜したらもつと出るかも知れない。

山科の上醍醐寺の寶藏に「平中將將門」の髑髏がある。桐の二重箱に入れて、大切にしまつてある。將門が醍醐の開基理源大師の法力で縛められ、梟し首に遭つたのを残念がつて、首が空を飛んで來たのを拾つたのだといふが、ことに依つたら、大師が申請けたのかも知れない。

ある夏醍醐に遊んでゐると、その頃の京都府知事O氏が山へ上つて來た。山の坊さんたちは知事に何を見せたものだらうかと色々詮議の末が、
「宋版の一切經や山樂の屏風を見せたところで、解りさうにもなし、やつぱり將門の髑髏を見せるに限る。あれならばまさか貰つて歸るとも言ふまいから。」
といふやうなわけでもあるかして、寶藏から例の髑髏をより出して見せた。

〇氏はためつすがめつ髑髏を見てゐた。ちやうど梅雨時分の事で、臭い匂がぶんとしてゐた。

「成程ね。よくは判らないが、やはり將門の骨らしいな。ここに叛骨が飛び出てる工合から見ると……」

暫く経つてから、知事は擦つたさうな顔をして言つた。

「へえ……叛骨と申しますと……」

坊さんが安つぽさうな頭を心もち前へ出した。

「ここぢや。叛骨といふのはこの骨のことぢや。」

〇氏は扇の端でちよつと髑髏の後頭部を突ついた。

「むかし蜀の孔明が部將魏延の頭を見て、此奴は叛骨が飛び出してるから、後に叛反をするぞと言つた……」

「へえ、そのお方の頭にも……」

坊さんはそつと自分の頸窩（あぐら）へ手をやつた。

見ると、〇氏の頭にも、安つぽい坊さんの頭にも、それらしい骨がちよつと飛び出してゐた。なに飛び出してゐたつて心配するものはない。叛反にも色々ある。男爵になりたがるのも、物持の檀家を欲しがるのも、みんな叛反には相違ないのだから。

禿山

講道館の嘉納治五郎氏は、書畫を娛しみたいが、正眞物の書畫は値段が張つてとても手が出せないからと言つて、書畫代用の妙案を實行してゐる。

それは他でもない、相模や紀州の海岸で、人里離れた、眺望のいい山を買ひ込んで、自分の別荘地としておくのだ。別荘地といつたところで、掘立小屋一つ建てるのではなく、夏になると、南向きの恰好な足場に天幕を張つて、飯だけは近くにある田舎町の旅籠屋から運ばせる事にして、日がな一日天幕を出たり入つたりして自然を娛しむのだ。

「眞物の山水のなかへ浸つて、自分も景物の一つになつて暮す氣持は、雪舟の名幅を見てゐるよりも、ずつと氣が利いてゐるからな。」

「そんなだつたら、何も自分で山を買はなくとも、何處でも構はない、景色のよい土地へ勝手に天幕を持込んだらよかりさうなものだが、嘉納氏に言はせると、さうはゆかない。」

「人間には所有慾つて奴があつて、自分のものにしなないでは落着いて娛しまれないのだ。兎一つ棲まないやうな禿山だつて、自分のものにするともた格別だからな。」

成程聞いてみれば無理もない。世の中には髪の毛一本生えてゐない禿頭を、自分の持物だといふだけで、毎朝磨きをかけてゐる人間もある事だから。

「相模や紀州の突端だけに、往來が不自由で、さうさうは出掛けられないが、然し雪舟の名幅だつて、何時も掛け通しにして置く譯のものではない。一年に一度が精々なのを思ふと、夏休みに、一度でも禿山を見舞つたら、それで十分ぢやないか。」

と言ひ言ひしてゐる嘉納氏は、
「さういふ雪舟代用の山だつたら、一度見せて貰ひたいものだ。」

と偶に愛想を言ふ人があると、急に顔の相好を崩して、

「是非見て貰ひ度い。富豪が雪舟を見せたがる格で、禿山でも自分のものになると、やはり見て貰ひたくてなあ。」

性 慾

トルストイ伯は、息子のイリヤが十八歳の頃、ある日屏風の裏表で背中合せになつて、「イリヤ、ここでは誰も聞いてはゐないし、私達もお互ひに顔が見えないから、恥づかしい事はない。お前は今日まで女と關係した事があるかい。」
と訊いたものだ。

息子のイリヤが、

「いいえ、そんな事はありません。」

と答へると、トルストイは急に^{すすりなき}歎息をし出した。そして子供のやうにおいおい聲を立てて泣き出すので、息子のイリヤも屏風の裏でしくしく泣き入つたといふ事だ。

トルストイは私に相談して泣いたわけでもなかつたから、何故^{なぜ}息子の返事を聞いて泣き出したか解る筈もないが、察するところ、自分が若い頃の不品行に比べて、息子の純潔なのに、つい知らず感激させられたものらしい。

T大学のM博士は、自分の近眼の原因を或る學生に訊かれた時、次の室の夫人に聞えないやうに聲を低めて、

「無論本も讀んだには讀んだがね。然し本をいくら讀んだからつて、人間は近眼になるものぢやない。僕は學生時代にね……」と安小説の表紙のやうにちよつと顔を赧くして「氣恥づかしい譯だが、性慾の自己満足を餘りやり過ぎたもんでね……」
と言つて、口が酸っぱくなるほど性慾の自己満足を戒めたさうだ。

M博士が自分の近眼と性慾の自己満足を結びつけて、深く後悔してゐるのは善い事だが、世の中には近眼者といつても澤山居る事だし、その近眼者皆が皆まで博士のやうな「後悔」

を持合せてゐまいから、たつて近眼を恥ぢよと言つたところで、さうさう恥ぢもすまい。

聖アントニウスはあの通りの道心堅固な生涯を送りながら、なほ側の人目に見えるまで性慾の煩悶に陥つてゐた。アントニウスの眼の前には毎夜のやうに裸の美人が映つて、一聖者を誘惑しようとして凡ゆる戯けた姿をして踊り狂つてゐたといふ事だ。

男の聖者が多く女の聖者を渴仰するに對して、女の聖者は大抵男の聖者に歸依する。ロヨラは聖母マリヤの信仰家であつたが、婦人の多くはナザレの耶蘇と精神的結婚を遂げてゐるのだ。もし耶蘇があゝの年齢で髪の毛の縮れた女房でも迎へてゐたなら、大抵の女は教會で欠伸か居睡りかをするだらう。實際女は猫のやうなもので、鼠のゐない時には吃度欠伸か居睡りをする事を知つてゐる。

女の 手

少し話が舊いが、日獨の國交が斷絶して、獨逸の日本留學生が一纏めに店立たなだてを食はされた時の事、皆は和蘭經由で英吉利に落ち延びようとして、日を定めて一緒に伯林のレアタア停車場を發つた。

何がさて、急場の事なり、書物や古靴や心の落着きなどといふ、荷厄介の物は、皆一纏めに下宿の押入に取残したまま逃げて來たので、皆は腑抜けのやうな顔をして溜息ばかり吐いてゐた。もしか兵隊さんの大きな面が窓越しに覗きこみでもしようものなら、皆は護謨毬のやうに一度に腰掛から飛び上つたかも知れない。

汽車がレアタアの次の驛に着くと、一人の若い娘が入つて來て空席に腰をおろした。それを見ると、そこらの黄いろい萎びた顔が一度に灯がついたやうに明るくなつた。それに何の無理があらう、娘の直ぐ隣には、A醫學士がゐた。A醫學士は、女をパラピンのやうに掌に丸め込む事に馴れてゐる男だ。

皆は言ひ合せたやうに、眼を閉ぢて睡つた風をしてゐた。醫學士は娘に向つて一言二言話してゐるうちに、いつも女を蕩す折にするやうに、掌の講釋を始めた。支那の哲學者が言つ

たやうに(A醫學士は哲學者とか、袋鼠とか、自分の知らないものは悉みん皆支那に棲んでゐると思つてゐるのだ。)人間一生の「幸運」は、掌の恰好と大きさに現れてゐるといふ前置で、

「お嬢さんのと僕のと、どちらが掌が大きいでせう、一つ比べてみませんか。」

と言つて、安々と娘の温かさうな掌と、不恰好な自分のとをびたりと合せたかと思ふと、その儘じつと握り締めた。

狸寝入りの連中は、もう胸をわくわくさせ出した。娘が別に振切らうともしないのに味をしめた醫學士は、圓まつちい娘の首根を抱いたかと思ふと、いきなり唇を鳴らした。

「うまい事をやつたのう。」

すぐ前のK法學士が、堪らなさうに喚いて眼を露くと、皆は一度に眼を開いて笑ひ出した。娘はたうとう居堪らなくなつてこそ、こそ次の室に逃げ出したさうだ。

國境へ立退きのどさくさにも、まだ女の唇を忘れないのは流石に醫者だけある。醫者の多くは、病人の枕もとに坐つて、藥代の胸算用が出来るほど心に餘裕のある人間だ。

女を賢くする法

今中座で「マクベス」を演つてゐる東儀鐵笛氏に、誰かが、
 「君も義齒の敷が殖えたやうだが、今のうちに戀でもしておいたらどうだね。」
 と言ふと、東儀氏はあの牛のやうな大きな眼をぐりぐりさせて、
 「人間も犢鼻褌一つで子供の枕もとで蚊を焼いて歩くやうになつちや、もうから意氣地がな
 So」
 とこぼしてゐた。

舊文藝協會當時、東儀氏が例のあけつ放しの氣質から、ちよいちよい松井須磨子に冗談で
 も言ふと、側で見てゐる島村抱月氏は、
 「東儀君、松井を可愛がるのは止して貰ひ度いもんだな。」

と、倫理の教師のやうな悲しさうな顔をした。

「君が可愛がると子供が出来るが、僕が可愛がると頭が出来るんだからね……」

流石に島村氏は學者だけに巧い事を言つたものだ。

女に頭を拵へるには、島村氏のやうな溫和しい學者に可愛がつて貰ふのもよいが、一番良
 いのは戀人に乘せて貰ふ事だ。女は男に突き放されると、一度に十年も賢くなる。

口は調法

英詩人野口米次郎氏の頭の天邊は、夙くから馬鈴薯のやうな生地を出しかけてゐた。氏は
 無氣味さうにちよつとそれに觸つてみて、
 「これは帽子を被りつけてゐるからだ。つまり一種の文明病だな。」
 と言ひ言ひしてゐる。

サミュエル・ジョンソンは自分の英辭書で「大麥」といふ語の下に、

「英蘭では馬の餌。蘇格蘭では人間の食物」といふ皮肉な解釋を下したが、例のT博士の説によると、日本人は英蘭の馬ではないが、麥飯さへ食つてゐれば、健康に少しも不足がないさうだ。

博士は病家を往診して、病人が鯛の刺身や吸物でも食べてゐるのを見ると、

「こんな物を食つちやいかん。麥飯だけで十分だ。」

と言つて、どうかすると自分でその膳の上のものをぺろりと食べてしまふ。そして、

「俺は構はんさ、醫者だからな。」と、すましてゐる。

その麥飯主義もまだ十分でないと思えて、T博士はその後「裸頭跣足」主義を標榜してゐるが、近頃また關西地方へ宣傳かたがた出掛けて來ると言つてゐる。「裸頭跣足」は言ふ迄もなく、帽子も被らず、履物も穿かない主義で、一口に言ふと、日本人を生蕃人にするのだ。生蕃人を日本人にしようとするよりも、この方がいつそ近道かも知れない。

金森通倫氏が政府の御用辯士として貯金の勧めを説きまはつてゐた頃、ある處で、「散髪なんか、一々理髮床でするには及ばない。めいめい鋏で剪み切る事したら、散髪代だけ儲かる。」

と言つたものだ。すると、正直な聴衆の一人が、

「貴方の頭は、やはり御自分で刈りになりますか。」

と訊いた。金森氏は酔を嘗めたやうな口もとをして、

「私は自分では刈らない。私は貯金の演説をする方で、貯金をするのは貴方がただ。」

と答へたさうだ。——口は調法なもの、出來る事なら、その口に帽子を被せて、ついでに上等な履物までも穿かせてやりたい。

俘虜研究

伊豫の松山は日露戦争以來俘虜の收容地になつてゐるので、そんな事から、彼地の實業家井上要氏は、色々な方面の報道を集めて俘虜研究を行つてゐる。

井上氏の言葉によると、露西亞の俘虜は一向研究心が無いから、長い間日本に居ても日本語はからきし解らなかつたのに、獨逸の俘虜は大抵日本語が解る。解るのみならず、上手にそれを操る事が出来る。

物を買ふにも、露西亞の俘虜は行きつけの店へ入つて、呢懇の積りで笑顏の一つも見せる事を知つてゐるが、獨逸の俘虜には一向行きつけの店といふものが無い。鞆くつした一つ買ふにも市中の雜貨商を二三軒歩き廻つた上、一番安い店で買ふ事にする。

露西亞人は俘虜になつても、自分は大國の國民だ、澤庵を齧つて紙と木片とで出来上つた家に住んでゐる日本人などと比べ物にはならないといふので、日本人が減多に手も着けない飛切の上等品を買ひ込むが、獨逸人は夢にもそんな贅澤な眞似はしない。買ふ物も買ふ物もみんな日本人が手に取らうともしない下等品で、値段が安くさへあれば、喜んで買ひ取る。

だから露西亞の俘虜は何時でも借金だらけで、「靈魂」が抵當になるものなら、それを書

入れるのに少しの躊躇もしないが、あいにく日本では「靈魂」の相場が安過ぎるので、詮事せうじ無しに自分達が本國から送つて貰ふ筈の月給を抵當に、行きつけの店から借り出すものが多かつた。獨逸人は借金どころか毎週きまつたやうに貯金をする。もしか日本の監督將校が不景氣な顔でもしてゐると、

「どうだ、金が要るのか。利子さへきちんと拂ふなら、幾らでも立替へるぞ。」
といふやうな事を言ふ。

露西亞人はあゝした暢氣な、お人好しの國民だから、俘虜になつても、例のオプロモフ主義で喰つては寝轉び、偶に女の顔を見てにやにやすくらゐが落おちだが、獨逸人となると持つて生れた研究好きで暇さへあると何か取調べを始める。誰だつたか獨逸人を地獄へ墮したら吃度地獄と伯林との比較研究を始めて、地獄の道にも伯林の大通りのやうに菩提樹の並木を植ゑつけたい、それには自分に請負はせて呉れたら格安に勉強するとも言ふだらうと言つたが、松山に居る獨逸の俘虜で日本の紋の研究を始めて、材料をどつさり集めてゐるのがあつたさうだ。

獨逸の俘虜は物を買ふのに、吃度雨降りの日を選んで出掛ける。雨降りだと日本人がうるさく付き纏はないから、鞆一つ買ふにも、町中歩きまはつて、ゆつくりと値段の廉いのを捜す事が出来るからださうだ。

天才

一部の畫家仲間には天才人と言はれた青木繁氏は、借金の名人で、どんな畫家でもがこの人と出合つて二語三語話してゐると、つい懷中から財布が取出したくなつたといふ事だ。

青木氏が東京に居られなくなつて、浴衣一枚で九州落ちをした事があつた。その折門司か何處かで、自分が子供の時の先生が、土地の小學校長をしてゐるのを思ひ出した。青木氏は世話になるには恰好の家だとは思つたが、流石に着のみ着の儘の姿がかへりみられた。

所へ魚釣りの歸途らしい子供が一人通りかかつた。手には小鮒を四五尾提げてゐた。青木

氏は懷中の寫生帖から子供の好きさうな畫を一枚引裂いて、それを小鮒の二尾と取替へつことをした。

「いい物が手に入つた。これさへあれば大手を振つて先生の家へ行かれる。」

青木氏はそれを持つて校長の宅を訪ねた。

「先日から門司へ寫生に來てゐましたが、今日はちよつと釣りに出掛けて、歸り途に丁度お門を通り掛つたものですから……」

とかう言つて、手にもつた小鮒を二三度振つて見せた。

「さうか、釣りの歸りが、よく訪ねて呉れたな。」

校長は手を把るばかりにして、青木氏を座敷へ引上げた。

何處をどう言ひ繕つたものか、青木氏はそのまま二月ほど校長の宅に平氣でごろごろしてゐたさうだ。

虱

今日阪神電車に乗ると、私の前に齡の頃は四十恰好の職人風の男が腰をかけてゐた。木綿物だがこざつぱりした身装みなりをしてゐるのに、メリヤスのシャツのみは垢染んで薄穢うすけかつた。閉たてきつた鎧戸に烏打帽子の頭を當てがつて、こくりこくりと居睡りをしてゐたが、電車がだ大物を出た頃に、ひよいと頭を持ち直して、ぱつちりと眼をあけた。そして手早く胸釦を外して、シャツを裏返しにしたかと思ふと、指さきに何か撮んでそれを左の掌に載せた。——よく見ると、血を吸つて眞赤になつてゐる虱なのだ。

虱は慌ててその邊を這ひ廻つてゐたが、職人の掌は職人の住んでゐる世界よりもずつと廣かつた。虱は方角を取り損つて中指にのぼりかけた。生れて唯の一度も運を擱んだ事のない掌だけに、指も普通のよりはすつと短かつたので、虱は直ぐと指先に上りついた。

職人はわざと皆に見えるやうに中指を鼻先に持つて来て、あたりを見廻してにやりと笑つた。この無作法なふりを見て皆は苦笑ひするより仕方がなかつた。

虱にちつぽけな馬車を曳かす蚤飼の話は噂に聞いてゐるのみで、實地見た事はないが、虱は唯もうその邊を這ひ廻るのみで、藝人としては一向價値が無い。

職人はしばらくそんな悪戯をしてゐたが、最後に袂を探つて、マッチを取出したかと思ふと、ぱつと火を擦つて虱の背に當てがつた。この懶惰なまこな藝人は肢をもじもじさせてゐたが、ぴちと爆ぜたやうな音を立てて、そのまま見えなくなつてしまつた。ちやうど耶蘇の死骸が墓のなかで紛失したやうなもので、不思議は四福音書にあるやうに、職人の掌にもあるものなのだ。

「人は自分の蚤を殺すには、自分の流儀を使ふより仕方がない。」

——佛蘭西人はよくこんな事を言ふが、眞實まことだと思つた。

狐と狸

兵庫の場末に、はげたなま化狸と間違つて婆さんを叩き殺した者があるさうだ。そんな過失のないやうに狸退治の極意をちよつとここにお話すると、狸はよく雨夜に出て悪戯をする。春雨のしとしとと降る折などに、夜路を一人通ると、だしぬけに傘が重くなる事がある。

「狸だな、やい見違ふまいぞ。」

誰でもが、狸はてつきり傘の上のしかかつてゐるものと思つて、唯もう夢中になつて頭の方ばかり氣にするものだ。

だが、これはとんだ間違ひで、實はこの時狸は傘の柄にぶら下つてゐるのだ。だから夜路で雨傘が重くなつたら、いきなり拳を固めて厭といふほど傘の柄の下を擲つてみる事だ。すると、狸はそのまま氣絶するか、さもなければ這ひ踞つて吃度謝罪をする。

ついでに狐退治の極意を披露すると、田舎の一軒屋などでは、夜が更けると狐がとんとんと扉を敲いて悪戯をする事があるものだ。そんな時狐は後向きになつて持前の太い尻尾で扉に觸つてゐるのだから、何氣ない調子で、

「どなた？」

と訊いておいて、暫くしてから扉をあけると、狐は吃度その邊の小陰に身を潜めてゐる。

わざとぶつくさ言ひながら扉をしめると、また後からとんとんと聞える。

「どなた？」

と扉をあけると、狐はもう居ない。三度目がいよいよの正念場で、扉を閉めて暫く待つてゐると、興にはずんだ狐の足音がして、尻尾の扉に觸るけはひがしたかと思ふ刹那、やにはに扉を引きあげると、後向きに尻尾を振りあげた狐は、勢みを喰つて闕越しに土間に轉げ込んで來るので、直ぐ手捕りにする事が出来る。

以上狐狸退治の祕傳、親類縁者たりとも極く内證の事、内證の事。

酒

少し前のことだが、Kといふ若い法學士が、夜更けて或る料理屋の門を出た。酒好きな上に酒よりも好きな妓を相手に、夕方から夜半過ぎまで立て続けに呷飲つたので、大分酔拂つてゐた。

街燈の灯も點つてゐない眞暗がりに、Kは自分の鼻先に脊のひよろ高い男が立ち塞がつてゐるのを見た。酔拂ひがよくするやうに、Kは叮嚀に帽子を取つてお辭儀をしたが、相手が會釋一つしないので、Kは少しむつとした。

「さあ、退いた、退いた。出來たての法學士様のお通りだぞ。」

Kはとろんこの眼を見据ゑて、呶鳴るやうに言つた。だが、相手は少しも身動きしなかつた。

喧嘩早いKは、いきなり拳をふりあげて、厭といふほど相手の頭をどやしつけた。が、相手は蚊のとまつた程にも感ぜぬらしく、Kを見下してにやにやと笑つてゐた。若い法學士は侮辱されたやうに暴やけにいきり立つて、

「野郎、かうして呉れるぞ。」

と、大きく両手をひろげて武者ぶりついたかと思ふと、力一ぱい頭突づつきを食はせた。法律の箇條書が一杯つまつてゐるはずの頭は、案外空つぽだつたと見えて、罐詰あきからの空殻を投げたやうに、かんと音がした。

Kは脳震盪を起してそのまま引つくり返つて死んでしまつた。相手は相變らず身動きもしない。身動きしないのもその筈で、相手は無神経な電信柱で、酔拂つたKは夜目にそれを人間と見違へて喧嘩をしてゐたのだつた。

Kは生き残つた母の手で青山の墓地に葬られたが、毎晩のやうにその夢枕に立つて、頭の向きが違つてゐるといふので、母は人夫を雇つて掘返してみると、かんと音のした頭は果して南向きに葬られてゐた。母親は泣きながら向きをかへて葬りなほしてやると、それ以來ま

た夢枕に立たなくなつたさうだ。

床 柱

最近『東西文學比較評論』といふ著作を公にした高安月郊氏は、飄逸な詩人風の性行をもつて知られてゐる人だが、ずつと以前自作の脚本を川上晋二郎一派の手で本郷座の舞臺に上したことがあつた。

ある日の事、月郊氏が幕合の時間を川上の樂屋で世間話に過してゐると、そこへ其の當時の大立物伊藤春畝公がKやSなどといふ子分を連れて、ぬつと入つて來た。なんでも眞頂がひに劇を見に來たのだが、例の氣紛れから樂屋口を潜つたらしかつた。

川上夫妻は狭苦しい自分たちの樂屋に、鷹揚な伊藤公の姿を見つけたので流石にちよつとどぎまぎした。見ると床の間の正面には作者の月郊氏が坐つてゐる。できることならその座

を公爵に譲つてもらひたく思つた川上は、眇のやうな眼つきをして、ちよつと月郊氏の顔を見た。

月郊氏もどうやら川上の意は察した所であつたが、實は伊藤公とは生れて初めての同座で今後またこんな機會があらうとも思はれなかつた。それに自分は今度の劇では作者であり、伊藤公は普通の觀客に過ぎない。作者が觀客に座を譲るやうな氣弱い事では、作者冥利に盡きるかも知れないからと、そのまま素知らぬ顔でじつと尻を落着けてゐた。

流石に伊藤公は無頓着で、悪い顔もせず、入口にどかりと胡床をかいたまま、芝居話に興じてゐたが、お件の政治家二人は苦り切つた顔をして闕際に衝立つてゐたさうだ。

鬼

陰陽博士で聞えた安部晴明の後裔が、京都の上京に住んでゐる。ある時、日の暮れ方に急

ぎ足で一條戻り橋を通りかかると、橋の下から、

「安部氏々々々」

と自分の名を呼ぶものがある。立ちどまつてみると、附近には誰一人姿は見えない。

安部氏はじつと耳を傾けた。聲は橋の下から聞えて来るらしい。掠めたやうな調子で、

「自分はもと洛中を騒がした鬼だが、餘り悪戯が過ぎるとあつて、貴殿の御先祖安部晴明殿のために、この橋の下に封ぜられてしまった。晴明殿はその後私の事などはすっかり忘れてしまはれて程なく亡くなられましたが、私こそいい災難で、橋の下に封ぜられたまま、あつたら月日を過してしまつた。どうか一生の願ひだから封を解いて貰ひ度い。」と言ふのだつた。

安部氏は亡くなつた父親の遺言にも、鬼の事は一向聞いてゐなかつたので、流石にちよつと驚いた。家へ歸つて色々古い書物を漁つて見ると、封を解く呪文だけはどうにか了解めたが、さて封を解いたものかどうかちよつと始末に困つた。

「折角先祖が封じたものを解いて、もしか鬼が自由思想か、社會主義かを鼓吹するやうな事

があつては堪らないからな。」

安部氏はかうも考へたので、その後はどんな急用があつても、戻り橋だけは通らない事にきめてゐると聞いた。

新約全書の鬼は豚の腹のなかに逃げ込んだので、豚はすっかり氣が狂つて海に入つて死んでしまつたさうだ。安部氏も一つ思ひ切つてその鬼を戻り橋の下から引き出して、大學の構内にも追ひ込んだら面白からう。あすこには頭に鬼の入るだけの空地を持つた學者が相當に居る筈だから。

お湯嫌ひ

最近希臘の各地方を巡遊して歸つて來た京都大學のH助教授は、希臘ほど失望させられた土地はない、あすこは唯想像でだけ楽しんでゐればいい國だと、ひどくこき下してゐる。

H氏の言ふのによると、希臘には道路が無い、旅館が無い、山には樹が無い、河には水が無い。やつと宿屋を見つけて泊り込むと、直ぐと南京蟲がちくちく螫しに来るのでとても寝つかれない。留學費のなから買ひ込んだ大罐の蚤取粉を、惜しげもなくばら撒いてみたところで、一向利き目がない。

それから今一つの難事は洗湯の高い事で、入浴料が日本の貨で一圓二三十錢。H氏の白狀によると、氏は二ヶ月餘りの旅に、湯に入つた事は唯の一回しかなかつたといふことだが、それも眞實の事だかどうかかわからない。もしか人の悪い誰かが、

「なに、希臘では偉い學者はみんな湯に入らぬものなんだ。」

と言ひでもすると、H氏はその口の下から、

「ほんたうは僕も一度だつてお湯に入つた事はなかつた。」

と白狀するかも知れない。

だから、希臘人といふ希臘人は皆垢まみれで、側へ寄つてみると酸っぱいやうな匂がぶんとする。

「ソクラテスや、アリストオトルも、やはりあんな匂がしたかも知れないと思ふと、いやになるよ。」

と、H氏は鼻をしかめて厭がつてゐる。

湯好きな日本人にも、また湯嫌ひが居ないことはない。俳優の中村鴈治郎なども其の一人で、彼はこの頃よく東京の劇場へ出るが、あの通りに白粉をべた塗りにする職業でありながら、一興行二十六日間、一度だつて湯に入る事はないさうだ。彼はそれがために洗湯好きな東京人に嫌はれるかも知れないが、持つて生れた癖だけに、平氣で垢塗れで通してゐる。

どくだみ

むかし京都の島原に五雲といふ俳諧師が居た。毎月二十五日には北野の天神へ怠らず參詣してゐたが、ある日、雨の降るなかを弟子が訪ねて行くと、五雲は仰向けに寝轉び、兩手を

組んで枕に當てがひ、兩足をあげて地面を踏むやうな眞似をしてゐる。どうしたのですと訊くと、今日は北野へ参詣の例日だが、雨が降るもんだから、かうして北野へ往き復りするだけの足敷を踏んでゐるのだと言つたさうだ。

面白いのは、この足敷を踏むに連れて、沿道の人家や立木などが次から次へと眼の前に幻となつて展開する事で、五雲は仰向けになつて、

「や、あすこにいつもの兩替屋の店先が見える。」

と、ひとりで娛しんでゐたさうだ。

亡くなつた上田敏氏は子供の時靜岡へ行く道中、てくてく歩きで箱根を越えた。丁度梅雨晴れの頃である。百姓家の軒續きに、心臟形の青い葉が一面蔓延つてゐる畑を見て、

「おやおや、蕺菜がこんなに植つてる……」

と獨言を言ふと、そこに居合はした百姓が笑ひながら、

「坊ちやま、これあ蕺菜ぢやござりませぬえ。坊ちやまの食べさつしやる甘藷でがさ。」

と言つて教へて呉れたさうだ。

上田氏はその後大學の教室に立つて、歐羅巴の近代文學を論ずるやうになつても、梅雨晴れの日光が硝子窓にちかちかするのを見ると、いつもその蕺菜の葉が幻のやうに想ひ出されると言つてゐた。

油が足りない

石油王ロツクフェアラが、ある時自動車に乗つて外へ出掛けようとする時、直ぐ側に何處の兒とも知れない六歳ばかりの小娘が立つてゐて、この富豪の顔をしげしげと見てゐるのに氣がついた。

一體富豪といふものは、十人が十人石のやうに冷い顔をしてゐるもので、平素人形やお母さんなどのにこにこした顔を見馴れてゐる子供にとつては、まるで別世界の感じがするに違ひない。

「小父ちゃん、何處へ行くの、自動車へ乗つて。」

子供は不思議さうに訊いた。もしか同じ問が紐育の新聞記者からでも訊かれたのだつたら
ロックスフェリアは急に感胃をひいたやうな顔をして、大きな噓でもしたのだらうが、相手が
可愛らしい子供だけに、にこにこして、

「さあ、何處へ出掛けようかね。小父さんはいつそ天國へでも行きたいんだが。」
と、いつもに似げなく冗談口をきいた。

子供はそれを聞くと、吃驚したやうに眼を圓くした。そして氣の毒さうに言つた。

「お止しなさいよ、小父ちゃん。天國へ行くには、自動車の油が足りないことよ。」

「さうか、油が足りないか。」

ロックスフェリアは子供の言つた事を繰返し繰返し、首を絞められた野鴨のやうな顔をして
暫くは其處に衝立つてゐたさうだ。

「天國へ行くには油が足りなく。」

子供といふものは巧い事を言ふものだ。私は富豪でないだけに、こんな警句がよく解る。

幽 靈

ある男が寺へ泊つた事があつた。夜が更けて眼が覺めてみると、誰だか障子の外でひそひそ
そ話をしてゐるのが聞える。氣になるものだから、起き上つて窓から見ると、あかるい月明
りの下に男と女とが立つてゐる。男は二十四五の、草臥れたやうな顔、女は六十ばかりの皺
くちやなお婆さんで、談話の模様でみると、夫婦といふやうなところがあつた。

その男は幽霊かなとは思つたが、それにしても二人の年齢が合點がゆかないので、そのま
ま夜明を待つた。東が白んでから、二人が立つてゐた附近へ行つてみると、小さな合葬の墓
があつて無縁になつてゐる。訊いてみると、墓の主人は大分以前二十四五で亡くなり、その
女房は久しく生き延びて、洗濯婆となつて暮しを立ててゐたが、二三年前に六十幾つかで死
んだので、ここに合葬したのださうだ。

それを聞いた寺の住職は、

「無縁だし、おまけに月がよかつたので、二人とも遊びに出たのだつしやる。」
 と言つてゐたが、二人とも丁度亡くなつた年齢相應の姿をしてゐたのには笑はずにはゐられなかつた。

男にせよ、女にせよ、連添に死別してから、四十年も生き延びてゐると、色々な面白いためになる事を覚えるものだ。洗濯婆さんだつて六十迄も永らへてゐるうちには、百科全書にもないやうな知識も獲たに相違ない。さういふ知識から見れば、二十四五で死んだ亭主は、まるで子供のやうで喰ひ足りなかつたらうと思はれる。

それを思ふと、情死する場合の他は、相手に二世の約束だけはしない方がよい。多くの場合、女は男よりも長生をするものだが、來世で皺くちやな女の顔を見るのは、男にとつて胃の薬を飲むよりもつらからう。だが、それよりもつらいのは、色々な事を知つた女が、うぶで無垢な昔馴染の男に出合つた時の事で、女はそんな時には、きまつたやうに頭の地を搔きながら、その後呢懇になつた誰彼の名を思ひ浮べながら、

「ときに、もう何時でせうね。」

と時間を訊きたがるものなのだ。よく言つておくが、女が時計の針を氣にするのは大抵逃げ出したい時に限るのだ。

鐵 扇

今は故人の松下軍治がしたたか者だつた事は知らぬ者もないが、譬へば、金を借りようとか手蔓を見つけようとかいふ目論見で、人を訪ねる事があるとす。 (松下が金と蔓と、此の二つの用事以外で人を訪ねようなどは夢にも思はれなかつた事だ。)

先づ應接室に通され、暫くすると隔ての襖があいて、主人の顔が見える。

「や、いらつしやい。お久しぶりですな。」

松下のやうな男には、誰でもが挨拶だけは成るべく叮嚀にしようとする。挨拶には別に資

本が掛らないで済む事だから。

「どうです、この頃の暑さは。随分厳しいぢやありませんか。」

かう言つて、主人はにこにこ顔で椅子に腰を下さうとする。

この時松下は腹一杯の聲で、

「御主人……」

とわめくと同時に、手に持った鐵扇で、思ひ切り強く卓子チャイルをどやしつける。(松下はこんな訪問にはいつも「體面」を置いて行くかはりに、机の抽斗ひきだしから鐵扇を持ち出すことにきめてゐる。)

主人は卓子の上の葉巻入と一緒に、吃驚して椅子から飛び上らうとする。松下はじろりとそれを尻目にかけて、

「お氣の毒だが、お冷水を一つ下さい。」

と靜かに言ふ。この場合お冷水だらうが、持參金つきの娘だらうが、相手の氣に入る事なら主人はどんな物でも調べてやらうと思つてゐる。かうなると、もう占めたもので、松下は希

望どほり相手の魂でも引抜く事が出来る。

松下のやり方は、他人を見れば敵と思つた封建時代の遺習で、型としてはもう徴が生えてゐる。往時の閑人はこんな輩に驚かないやうに、武道や禪學で膽を練つたものだが、今の人達は、その武道や禪學の代りに、お蔭で「生活難」で鍛へられてゐる。「貧乏」は鐵扇の音に吃驚しないばかりか、鐵扇を質に入れる事さへ知つてゐる。

涙

東京三越の「山と水」展覽會に、故人角田浩々歌客が世界の各地から集めた石と一緒に、塚本博士が出品した瓶詰の黄河の水があつた。

英國の或る停車場の驛長は、グラッドストーンが落して行つた靴の踵を拾つて、叮嚀に箱入にして藏つておいたといふから、黄河の濁り水を瓶に入れて持つて歸つたからといつて別

に咎め立てもしないが、同じ持つて歸るなら、もつと美しい物を見つけてもらひたかつた。波斯で、亭主に死別れたばかりの新しい未亡人を訪ねると、吃度棚の上に大切さうに瓶が置いてあるのが目につく。他でもない、波斯では未亡人といふ未亡人は、亭主に死別れてからは毎日々々涙を一雫も零さないやうに小瓶に溜めておいて、それが二本溜ると、喪を廢める事になつてゐるからだ。

一雫も零さないやうにするのは、何も追懷の涙が神聖なからではない。成るべく早く瓶を詰めて喪服を着更へてしまひたいからだ。多くなかには亭主の事を追懷しても一向涙など出ないのがある。(それに不思議はない筈だ。涙は亭主の生きてゐる間に、みんな絞り出してしまつたのだから。) そんな輩は、涙脆い女を見つけて、一瓶幾らといふ値段で涙を買ひ取り、一日も早く喪を済まさうとする。

ある皮肉家が、昔の詩人は血で書いた、中頃になつては墨汁で書いた、それが極く近頃になつては、墨汁に水を割つて書くやうになつたと言つたが、涙にしても水を割つたら、直ぐ瓶に詰りさうなものだ。が、さうはしないで、縁もゆかりも無い者からでも、やはり正眞物

の涙を買ふところに、ちよつと女房の情合が見えてゆかしい。

目薬瓶に涙一杯！良人にとつて申分のない値段である。

俳優の家

ある時、門司で若い藝妓が病氣で亡くなつた。流行つ妓だけあつて、生きてゐる間には、色々な人に愛想よくお世辭を言つてゐたが、亡くなる時には、誰にも相談しないでこつそり息を引きとつた。

枕許に坐つて看護をしてゐた妹藝者が、何か言ひ残す事は無いかと訊ねると、
「三毛猫をひもじがらさんやうに頼みます。」

と言つて寂しさうに笑つた。呉々も言つておくが、その藝者が最後まで氣にかけてゐたのは三毛猫の事で、最眞筋のお醫者さんや辯護士やを、ひもじがらすなと言つたのではさらさら

ない。

その事が土地の新聞に載つたのが、ふとした事で大阪俳優のGの目にとまつた。Gはその折玉屋町の自宅で、弟子に肩を揉ませながら新聞を読んでゐた。で、その藝者の亡くなつた記事が目につくと「あつ」と言つたが、直ぐ顔を揚げて悴のCを呼んだ。

「C公、C公は居やへんか。」

「C公は隣の室から返事をした。」

「何や、お父さん。」

Gは聲のする方を覗き込むやうにちよつと首を伸ばした。

「そこに居よつたんか。お前あの門司の△△はんと昵懇やつたんやろ。そやなあ。」

C公は他事でも訊かれたやうに軽い調子で答へた。

「ふんさうやつた。どうしたんや、それが。」

「△△はん、死によつたぜ。」

「さよか。」

C公は起き上らうともしなかつた。彼は腹這ひになつて舶來の玩具を弄くつてゐたのだ。

親子が顔をも赧めないで、平氣で自分の情事を話し合つてゐるのが俳優の家庭である。舞臺で人生を演活するためには、平常からかうした囚はれない情態が必要なのか、それとも舞臺の心持が家庭生活にまで傳染つてゆくのだらうか。

どちらも眞實だらう。そしてつと眞實なのは、親子のどちらにも取つてこれが一番都合がよいからであらう。

果物

馬來半島にヅリヤンといふ果物のある事は、一度でも船であるここを通つた事のある人は皆知つてゐる筈だ。素敵にうまい上に、素敵に臭みをもつてゐる果實で、一度でもあの臭みを嗅いだが最後、一生かかつたつて、それが忘れられるものではない。

だが、食べ馴れて来ると、そんな臭みでさへもが堪らなく懐かしくなつて来るさうで、ズリヤンが市場に出盛る頃には、遊女街までが不景氣になるといふことだ。

獨逸軍の毒瓦斯に對して、ズリヤンを砲彈代りに使つたらどうかと聯合軍に勧めたものがある。命中^{あた}つたが最後、穀の刺毛^{とげ}で人間の五六人は殺せるし、命中らなかつたところで、巧く爆ぜさへすれば激しい臭みでもつて、一大隊くらゐの兵士を窒息させるのは朝飯前のことだといふのだ。

土人達の習慣によると、ズリヤンを盗んだ者は重く罰せられるが、熟れて自然に落ちたのを拾つた者は、とんだ幸福者として羨まれるさうで、氣の長い土人達は、ズリヤンの鈴生^{なま}に生つた木陰で、朝つばらから煙管を啜へて一日じつと待ち通しに待つてゐるさうだ。巧く落ちたのを拾ふ事が出来れば、うまい果物にありつけるし、落ちて来なかつたところで少しの損もない。そんな時には土人はきまつたやうに晝寝をする事を知つてゐるから。

胃の腑

ラフエエル前派の詩人ロゼツチが、自分の詩集を亡き妻の棺に納めて葬つたのを、後になつて友達の勧めに隨ひ、妻の墓を掘りかへして、詩集を取出したのは名高い話だ。

新納武藏守は薩摩武士の生粹で、例の冗談好きな豊太閤の歌にある、ちんちろりんのやうな長い髭を生やした男だつた。

ちんちろりんは、ひどい嫉妬^{やまもや}焼きで、雌がほかの雄と立話でもしてゐようものなら、いきなり相手を後肢で蹴飛ばすさうだが、薩摩の人もこの點ではちんちろりに劣らぬ嫉妬^{やまもや}焼きである。

新納武藏に可愛がられてゐた若い小間使があつた。ある日、雨の徒然に自分の居間で何だか認めてゐると、そこへ武藏が入つて来た。

はつと思つて、女が袖の下へそれを隠すと、武藏は険しい顔で覗き込んだ。すると、女は意地になつて、よく小娘がするやうに其の反古を口の中に噛みしめて、ぐつと嘸み下してしまつた。

武藏は女が隠し男にやる内證の消息とでも思ひ違ひをしたものか、激しい嫉妬で顔は蟹のやうに眞赤になつた。そしていきなり女を手打にして、胃の腑のなから其の反古を引張り出した。

反古には優しい筆の蹟で、

人ならば浮名やたん小夜ふけて枕にかよふ軒の梅が香

としたためであつた。武藏もすこしは歌を咏んだ男だけに、蟹のやうな顔に涙を流して不憫がつかつた。

女と薪

この頃發賣禁止になつた、『ボヴリイ夫人』の原作者フロウベエルが、ある婦人と戀をした事があつた。婦人は或る時伊太利語を彫りつけた葉巻入をこの小説家に贈つたところが、フロウベエルは小説の女主人公が自分の情夫に贈物をする時に、その伊太利語をそのまま借用したものだ。

それを見た女は、眞剣な自分の戀を馬鹿にしていると云つてむくれ出した。温和おとなしいフロウベエルは色々と辯解をしたが、嫉妬焼きの女はどうしても承知しないので、小説家もたうとう本氣になつて怒り出した。そして薪きざつ棒をふり上げて擲り倒さうとした。(小説家だといつて薪きざつ棒をふりあげないものでもない。ニイチエは女を訪問する時には鞭を忘れるなと言つたが、鞭を忘れた時には、薪きざつ棒でもふりあげねばなるまい。)

フロウベエルは薪ざつ棒をふりあげた。女は部室の片隅に顛へながら、まだ家鴨のやうに我鳴り立ててゐた。この時小説家の頭に、若しか擲り倒してもしたら、女は直ぐ告訴するだらうといふ考へが矢のやうに走つた。フロウベエルは薪ざつ棒を足もとに投げ出したまま、ふいと室を飛び出したが、それきりもう歸つて來なかつた。

女が口喧しいからといつて、警察の手に引渡した男はない筈だ。それなのに男の手に薪ざつ棒を見ると、女は直ぐ法律の腕に継らうとする。武器としての女の口は、薪などとはとても比べ物にはならない。薪は間違つて肉を叩き潰すかも知れないが、女の舌は一度に靈魂を窒息させてしまふ。

洋傘

曩に物忘れの事を書いたが、獨逸の歴史家モムゼンは専門以外の事は何でもよく忘れるの

で聞えた男で、ある時大學から歸つて自分の書齋に入ると、何を思ひ出したものか、卓子の周圍を掃除し出した。見ると寢椅子の上に古綿のやうなものがあるので、ぶつぶつ言ひながらそれを引摺んで反古籠に放り込んだ。

古綿は急に蛙のやうな聲をして泣き出した。吃驚したモムゼンは、側へ歩み寄つてよく見ると、古綿のやうな物は、その頃生れたばかりの孩兒おかんぼであつた。お蔭で學者は細君にこつ酷く叱り飛ばされてしまつた。

早稻田のT博士が當時の高田文相などと一緒に高野に上つた事があつた。見物も一通り済んで、いよいよ下山といふ段になると、博士はお寺の土間をうろろして、何だか捜し物でもしてゐるらしかつた。

「何か忘れ物でも……」

「洋傘が見えないんです。先刻ここへ置いたと思ふんですが……」

T博士は薄暗い土間の隅つこを雞のやうに足で搔き捜してゐた。

「洋傘だつたら、君が腋に挟んでるぢやありませんか。」

高田氏は笑ひ笑ひ言つた。氣がついてみると、博士は大事の大事の繻子張りの洋傘を小脇に挟んだまま、もう一本捜してゐるのだつた。

道成寺の石段

むかし徳川初代の頃に本願寺の役人に下間某といふものがあつた。亂舞にかけてはなかなかの巧者で、徳川家の前などでも、いつも召されて亂舞を舞つてゐた。

ある時、このなかがしが紀州の道成寺に詣つた事があつた。その折も例のやうに拍子を踏み踏み石段を敷へてゐたが、ふと立ち停つて、不思議さうな顔をして道づれに言つた。

「この鐘樓の石段は、一つだけ土にでも埋れてゐるのぢやなからうか。今一つづつ踏んでみるのに、どうしても段拍子に合はない。」

道づれは變な事を言ふとは思つたが、相手があを通りの巧者だから、笑つてばかり濟まず

譯にもゆかないので、土を掘り下げてみると、下から石段が一つ出た。

京都の桂離宮は小堀遠州が豊太閤に命ぜられて、一世一代の積りで拵へた名園だが、ずつと後になつて遠州の孫が、その結構を視に庭へ入つた事があつた。木戸口を潜つて庭石を二つ三つ踏んだかと思ふと、ひよいと立ち停つたまま、

「どうも解らない。」

と、じつと考へ込んでしまつた。

案内の男が、

「何がお解りになりませぬか。」

と訊くと、

「いや、この石だが、もう少し右に置いてなければならぬ筈なのだ。」

と、獨言のやうに言つた。考へてみると、一二年前に庭木を入れる事があつて、その折件の庭石を引剝したまま、植木屋の手で勝手に据ゑ直してあつたのだ。

このやうに、物にはちゃんと拍子といふものがある。この拍子を見分けるやうになると、

物の巧者だと言へる。

女博士

ケエリイ・トオマス嬢といへば、かなり聞えた女博士で、今は威耳斯のプラン・モウル大學の校長を勤めてゐる。

トオマス嬢が或る日の夕方、美しく刈込まれた学校の校庭を散歩してゐた。晩食は消化のいい物でうまく食べたし、新調の靴は繊細な足の裏で軽く鳴つてゐるしするので、女博士はすつかりいい氣持になつてゐた。そして出来る事なら天國へ行く折にも、こんな消化のいい物を食つて、こんな軽い靴を穿いてゐたいと思つた。

だしぬけに寄宿舎の一室から、けたたましい騒ぎがきこえて來た。拍手の音さへまじつてゐた。

「何事だらう。」

女博士は静かな眉尻にちよつと皺を寄せた。そして天國の黄金の梯子でも下りるやうな足つきをして、かたことと廊下を歩いて、騒ぎの聞える室の前に立つた。

トオマス嬢はとんとんと扉を敲いた。

「どなた。」

内部から誰かが訊いた。

「It is me. ミス・トオマスですよ。」

博士は静かに返事をした。

「違つてよ。」なかから突走つた聲が聞えた。「トオマス博士だつたら It is me. なんておつしやらずに It is I. とおつしやるわ。」

女博士は困つたなと思つて、そのままそつと逃げ出さうとしてゐると、内部から扉があいて、悪戯盛りの女學生が「ばあ」と言つて顔を出した。

臺灣と考へ事

岡松参太郎博士の言葉によると、満洲に居る時は、頭がはつきりと澄んで、細かい考へ事や計算なども樂に出来たが、臺灣へ出掛けると、頭がぼんやりと草臥れてしまつて、考へ事はとんちんかんに、計算は間違ひだらけになる。臺灣に三日も過すと、満洲に三十日も居たほど疲れが出るさうだ。

臺灣の或る製糖會社に大學出の支配人がゐる。年に一度同窓生の會合があると、いつも遙東京まで出掛けて来る。そして會が始まつて、皆の者が何か議論がましい事でも言ひ出すと、怪訝な顔をしてそれに聴きとれてゐるやうだが、暫くすると椅子に凭れたままぐうぐう鼾をかいて睡つてしまふ。

ひとしきり喋り疲れた連中が、どしんと一つ卓子を敲いて、

「△△君、君の考へはどうだね。」

と訊くと、慌てて椅子から飛び上つて、

「さうですね、僕の考へは……」

と言つて、きまつたやうにポケットから鉛筆を取出し、ちよつと卓子の上に立ててみて、誰でも構はない、それが倒れかかつた方の味方をする。

心安立の友達が、鉛筆もまんざら悪くはないが、いつもあれでは餘りに無定見すぎるぢやないかと言ふと、支配人は砂糖臭い大きな欠伸を一つして、

「でも、僕には皆の喋つてゐる事が、てんで解らないんだもの。僕も今ぢやすつかり臺灣向きだよ。」

この支配人の言ふのでは、臺灣では考へ事はどうしても出来ない。唯二つのうちの一つの選擇があるばかりだ。譬へて言つたら、朝と晩、總督と生蕃、砂糖と樟腦、成功と失敗といつたやうなもので、それを選ぶにしても、鉛筆は人間の頭よりも、ずつと明晰に判斷するさうだ。

苜 蓿

北歐の或る詩人は、外へ出掛ける時には、いつも両方のポケットに草花の種を一杯詰め込んで、草の生えさうな土地を見かけると、所構はず何處へでもふり撒いて歩いた。

京都の御所を通つた事のあるものは、御苑の植込に、所嫌はず西洋種の苜蓿うまじやしが一面に生え繁つてゐて、女子供が皇宮警手の眼に見つからないやうに、そのなかに蹲踞うまじやしんで、珍しい四つ葉を探してゐるのをよく見掛けるだらう。

この苜蓿は、丹羽圭介氏が、明治の初年歐羅巴へ行つた時、牧草としてはこんなこゝろに好い草はないといふので、その種子をしこたま買ひ込んで歸つたものだ。さて日本に着いてみると牛どころか、まだ人間の始末もついてゐない頃なので、歐羅巴で考へたのとは大分見當が違つてゐた。

さうかといつて、苜蓿を京都人に食べさせる譯にもゆかなかつたので（京都人は色が白くなるはくとさへ言つたらどんな草でも喜んで食べる。）丹羽氏は折角の種子を、みんな其邊へぶち撒けてしまつた。それが次から次へと蔓延はびこつて、今では御苑の植込は言ふに及ばず、京都一體にどこの空地にも、苜蓿の生えてない土地は見られないやうになつてしまつた。

苜蓿によく似た葉で、淡紅色の可愛らしい花をもつ花酢漿はなかくたはみも京都にはよく見かける。この花の原産地は阿弗利加の喜望峰だといふ事だが、何處をどう通つて京都の山のなかにまで来たのか、ちよつと判らない。

蜜 蜂

ある蜜蜂飼養家が何かの用事で印度へ渡つて見ると、野にも山にも花といふ花が咲きこぼれてゐるので、その人は躍り上つて喜んだ。

「印度つて、こんなに花の多い土地とは知らなかつた。ここで蜂を飼つたら、しこたま蜜が獲れるに相違ない。」

そして、急いで國へ歸ると、蜜蜂をもつて又も印度へ出掛けて行つた。ちやうど金持を見つけた賭博打が、骰子さいころを持つて酒店へ出直して行くやうに。

骰子ほど意地の悪い物はない。蜜蜂は箱から取出されて、美しい香氣を嗅ぐと、狂氣のやうになつて花の中を轉げ廻つたが、何時まで待つても蜜を拵へようとはしなかつた。それもその筈で、印度のやうに年がら年ぢゆう花のある土地では、蜜の貯へを拵へておく必要もなかつたのだ。蜜蜂飼養家は大事な蜂を失つた代りに、いくらか賢くなつて、郷土へ歸つて來た。人間といふものは賢くなるためには、從來持つてゐた何物かを失はなければならぬといふと、女房や馬に遁げられるよりは、蜜蜂を失くした方がまだ仕合せだつた。

文學者のN氏は、文士や畫家が片手間の生産事業としては、蜜蜂ほど好いものはないといつて、ひとしきりせつせと蜜蜂の世話を焼いてゐた。そして蜂に螫されない用心だといつて細君が着古した面帕ヴェールをすつぽり頭から被つてゐた。

蜜蜂を扱ふのに面帕が要るやうだつたら、女を扱ふにはそれを二枚も重ねなければならぬ。臆病者に限つて、劍は長いのを持つてゐる世の中だから。

魔法使

役人に嘔吐が多いやうに、瓜哇人には魔法使が多い。日本の女で馬來半島に住んでゐる佛蘭西人の妾が、ある時國許に送つてやらなければならぬ筈の金錢の事で心配してゐると、そこへ瓜哇の魔法使が通りかかつて、

「お前は金錢の事で屈託してゐるらしいが、さう心配するがものはない。今日午過ぎにお前の主人が頭が病めると言ひ出す、その折お前は何となく睡つぽくなるだらうから、それをきつかけに主人に相談してみろ、吃度金錢は出来る。」
と言つて教へて呉れた。

女は不審しながらも、魔法使の事は聞いてゐるので幾分か待心でゐると、午過ぎになつて案の定主人が頭が病めると言ひ出し、自分も睡つぽくなつて來た。ここぞと思つてお金の一件を相談すると、主人は二つ返事で重い財布を投げ出して呉れたさうだ。

瓜哇の魔法使は又かういふ事をする。多くの人の見る前で、砂を盛つた植木鉢へコスモスの種子などを播いて、じつと祈禱をする。すると種子が弾けて、芽はぐんぐん砂を持上げて頭を出して來る。一寸二寸と、瞬く間に莖が伸びたかと思ふと、最後に小さい花がぱつと開く。あしたえ 蹇あしたえを立たせた基督だつて、これ以上の不思議は出來まいと思はれる程だ。言ふまでもなく基督は神様のお坊ちゃん、瓜哇の魔法使は乞食坊主である。

食物と格言

むかし瀧川雪堂といふ男が百人組の頭になつて、當直の行厨べんたうに使ふ食器を新しく拵へた。

その蓋に、食事をする度に見て心得になるやうな文句を書いてくれと、學者の大郷信齋に頼んで寄した。信齋は佐藤一齋などの先輩で、鯖江侯のお抱へ儒者であつた。

信齋は自分の學問の底を叩いて、色々ためになりさうな名句を拾ひ集めては比べてみたりした。そしてやつと出來上つたのが、平ひらの蓋に、

「咬得菜根百事可做」

汁の蓋に、

「不素餐兮」

飯の蓋に、

「粒々皆辛苦」

といふ固苦しい文字で、言ふまでもなく汪信民や、朱雲や、李紳の往事むかしごとから拾つて來たものだつた。

役人や、会社の重役などの辨當箱には、是非書いておきたいやうな文句だが、普通の入りはちよつと咽喉につかへさうでいけない。こんな文句を毎日眼の前におきながら辨當をばく

ついてゐた雪堂といふ百人頭は、性來齒ぐきの勁い、胃の腑の丈夫な男だつたらしい。

そこへ持つてゆくと、賣酒郎噲々が、所謂七重の絹で七度漉した酒を飲ませたといふ、東山の竹醉館は、表の招牌まねかんばんも、

「この肆の下物、一は漢書、二は雙柑、三は黃鳥一聲」

といふしやれた文句で、よしんば摘み肴一つ無かつたにしろ、酒は旨く飲ませたに相違ない。

飯を食べさせるにも、酒を飲ませるにも、それと一緒に想像をも味ははせなければ嘘だ。

肉皿に新しい野菜と想像とを一緒に盛る事の出来る細君にして、初めて臺所を委せる事が出来る。

新 畫

トルストイは、『藝術とは何ぞや』といふ書物のなかで、佛蘭西の新しい詩人を攻撃しよう

として、作家連の詩集から例證をあげるのに奇抜な方法を選んだ。それはいろんな詩集から廿八頁目の詩を引抜いて來るといふことなのだ。

茶話子は散歩をするのに、四つ辻へ來ると、手に持った杖なり蝠傘なりを眞直ぐに立ててみて、それが倒れた方へ歩き出す事がよくある。

近頃新畫の展覽會があちこちで開かれるが、作家と繪の出來映について何の好惡も持たない今の成金のなかには、眼を閉ぢて番組を押へるとか、又は從來自分に縁起のよかつた25とか26とかの番號に當つてゐるのを搜すとかして、それを買ひ取る事にきめるのがある。

そんな時にはどうかすると、同じやうな買手が顔を出すもので、互ひに意地を張つた末がきまつたやうにぢやん拳で取決めをする。よく新畫の展覽會へ出掛けると、一つの畫幅の前で鋭い顔をした男が三四人、ぢやん拳をして、きやつきやつと輕躁かじやぎ散らしてゐるのを見掛ける事がある。

なかには地所を買ふより割がよいといつて、展覽會があると、繪など一目も見ようとはしないで、電話でもつて何號から何號まで、總高幾千を赤符を貼つて置いて貰ひたいと、まる

で勸業債券でも買ひこむやうな取引をするのがあるさうだ。
流石は結構な美術園だ。

佛 畫

早稻田大學の某氏は、近頃眞黒に燻つた佛畫を持ち廻つて、頻りと購客かひてを捜してゐる。幾らだと訊くと、

「まあ、ぐつと見切つたところで一萬圓。」
と言ふので、大抵の人は肝腎の佛畫は見ないで、某氏の顔を見て笑つて済ましてゐる。

某氏はそれがもどかしくなり、友達を説き廻つて、

「誰でもいい、この畫を一萬圓にとりもつて呉れたなら、手数料として千圓くらゐ出しても
550」

と言ふので、仲間の美術通や畫家などは、血眼になつて得意先を駈けすり廻つてゐる。言ふまでもなく美術通や畫家などといふものは、閑暇がある代りに金が無い連中である。

一體佛畫といふものはざらにあるが、名高い二十五菩薩來迎や山越の阿彌陀などを除くと何れも凡作揃ひで話にもならぬが、美術の好きな者には盲目が多く、盲目には富豪が多いから、くだらぬ佛畫に萬金を投じて悔いしないのだ。

某氏の佛畫はまだ見た事もないし、それに賣物の事だから彼是言はうとも思はないが、一體何を標準めやすに一萬圓といふ賣値をつけたのかと訊いてみると、亡くなつた岡倉覺三氏が其の畫を見て、米國へ持込んだら吃度三萬圓には賣れるだらうと言つた、その一言を標準ひんぎんに、大負けに負けて一萬圓といふのださうだ。

岡倉覺三氏は邦畫の鑑定にかけては、随分鋭い鑑識を持つてゐた人だから、あの人の鑑定つきだつたら、三萬圓くらゐ放り出す富豪があつたかも知れないが、さうかといつて今さら地獄へまで鑑定書を取りにも行けまい。

その一萬圓が手に入つたら、支那畫を研究してみたいと某氏は言つてゐる。支那畫も善い

には相違なからう。人間といふものは、金銭が手に入らない間は、いろんな善いことを考へつくものだから。

緑 青

ある畫家の使つてゐる紅の色が、心憎いまでに立派なので、人々は吸ひつけられたやうにその畫の前に立つた。そして不思議さうに訊いたものだ。

「どうも素晴らしい色彩ぢやないか。一體どこから手に入れたんだね。」

畫家はそれには答へようもしないで、牛のやうに黙りこくつてせつせと仕事に精を出してゐたが、畫が出来上るにつれて、身體はだんだんと衰へて來た。そして仕上げに今一息といふ際どい時になつて、刷毛を手にしたまま、畫の前に突伏して倒れてゐた。人々が死骸をとりかたづけようとして気がつくとき、畫家は耶蘇のやうに胸に孔があいてゐて、孔からは

眞赤な血が流れてゐたさうだ。

四條派の名家だつた望月玉泉が、晩年に京都の或る高等女學校に邦畫の教師として一週幾時間かを勤めてゐたことがあつた。普通の繪具は生徒が持合せの安物の水繪具で辛抱してゐたが、緑青と群青とだけは、自分の宅から持込んで來て、それを生徒達に使はせてゐた。

「これは緑青と群青やで。どつちやも高い繪具やが、あんた方はお弟子やさかい、廉う負けといて、一度分五錢にしときまつさ。」

玉泉はこんなことを言つて、その緑青と群青とを使つた生徒からは、その場で五錢づつ受取つて袂に投げ込んでゐた。

生徒が草花の寫生でもすると、玉泉はじつと覗き込んで、

「よう出來よつたな。それに緑青をお塗りやすと、ぐつと引立ちよるがなあ。」
といつたやうな調子で、わざわざ懷中の緑青を塗らせたものださうだ。

天 井 畫

本阿彌光悦が書いた本法寺の額は、「法」といふ字の扁が二水になつてゐるので名高いものだ。光悦はああいふ道の巧者だけに、本法寺の門を流れてゐる水を、その一水に象つてわざとさうしたのだといふ説もある。

むかし天龍寺塔頭の或る寺にあつた書院の杉戸は、探幽の筆として聞えたものだつた。戸には李白一人が描いてあつて、瀧らしいものは少しも見えなかつた。これは嵐山の戸無瀨の瀧が目の前に落ちてゐるので、瀧はわざと描かなかつたのだ。

池坊の祖先某は、六角堂に立花の會があつた時、自分の花にわざと正心松を缺いて活けておいた。それが一座の人の噂の種となつてゐる頃、池坊は、

「松は今御覽に入れます。」

と、障子を引きあげると、庭にあるすばらしい枝ぶりの松が、うまく立花のなかに取入れられたさうだ。流石に池坊式で、拵へ事のわざとらしさが目に立つやうだ。

畫 家 と 商 人

東京の繪畫商人の某が京都で展覽會を開くために、ある四條派の老大家の許へ半切の揮毫を頼みに出掛けた。高が半切だと聞いて畫家は會はうとしなかつた。

「先生はお忙しうおすさかい、なかなかお出來になりまへんぜ。」

玄關番は闕際に突立つたまま、欠伸をしいしい言つた。玄關番といふものは、主人が奥で欠伸をする時分には、自分も亦きまつて玄關でそれをするものだ。

商人は四條派の畫家に、よく金を欲しがらる持病があるのを知つてゐたから、
「それでは今日伺つた印に、潤筆料だけ承つて参りませう。」

と言つたものだ。玄關番は商人の前に片手を擴げてみせた。

「半切一枚五十圓どす。」

商人は懷中から財布を取出した。

「それでは此處に五十圓差上げて置きますから、お氣に向いた時に一枚御揮毫を願つておきます。」

玄關番はそれを見ると、急ににこにこし出した。

「そんなやつたう最一度頼んで來まつさ。なに理由を話したら、先生の事やさかい、半切の一枚や二枚ちよつくらちよつと書いて呉りやはりますやろ。」

さう言つて奥へ隠れたかと思ふと、玄關番はまた表へ飛び出して來た。

「唯今先生がお會ひになりますさかい、まあどうぞお上り……」

今度は商人が承知しなかつた。

「折角ですが、私は繪をお頼み申しに上りましたんで、先生にお目に懸りに來たのではありませんから。」

と言つて、そのまますたすたと歸つてしまつた。

流石に商人は目がはしこかつた。繪は賣るために註文したので、畫家に會つたために賣値を崩すやうな事があつてもつまらなかつた。實際畫家のなかには、その人に會つたがために折角描いて貰つた錦鶏鳥の畫までが厭になるやうな人も少くなかつた。

「先生はお忙しうおすさかい……」

先生がお忙しいのは、先生自身に取つても、お客に取つても勿怪の幸福であつた。どちらも損をしないで済む事なのだから。

畫家と書物

京都大學の某教授は、日本畫家の作物を貶して、畫家はどうしても本を讀まなければ駄目だと言つたさうだ。畫家に本を讀めといふのは、大學教授に鬚を剃れといふのと同じやうに

良い事には相違ない。だが、剃立ての顔が學者に似合はない事もあるやうに、どうかすると本に食中^{しよくちゅう}りをする畫家もある事を忘れてはならない。某教授は本を読む畫家の代表として富岡鐵齋をあげて、あの人の畫には氣品があると言つたさうだが、よしんば氣品はあるにしても鐵齋の畫には畫家の敏感がよく出てゐない。畫家に本よりも大切なのは敏感である。

むかし今津に米屋與右衛門といふ男が居た。富豪の家に生れたが學問が好きで、色々の書物を食^くり讀んだ。珍しい働き手で、酒男と一緒に倉に入つてせつせと稼いだから、身代は太る一方だつたが、太るだけのものは、道修繕、橋普請といつたやうな公共事業に費して少しも惜しまなかつた。亡くなつた時には方々の人がやつて來て聲を立てて泣いた。なかに一人智慧の足りない婆さんがまじつてゐて、おろおる聲で、

「これほど學問してさへ、こんな好いお方だつたから、もしか學問などしなかつたら、どんなにか立派なお人だつたらうに。」

と言つたさうだ。

婆め、なかなか皮肉な事を言ひをるわい。

馬車の葬式

巴里の辻々にある圓太郎馬車が廢められて、自動車^{自動車}が代るやうになつた時、その會社員を初め乗りつけのお客さん達が、サン・シュルピイスのお寺で乗合馬車の葬式を行つた事があった。

舊教の坊さんが勿體ぶつて聖書を朗讀すると、會葬者は聲を合せて「アーメン」と唱へた。いくら伶俐な使徒だつて、まさか乗合馬車のお葬ひまでしようとは思はなかつたらうから、それに相應した文句は残さなかつたらうが、巴里の坊さんは別に引導には困らなかつたらしい。何故といつて聖書で見ると、どんな馬車だつて、人間のやうな罪の重荷は背負はなかつた筈だから。

式が済むと、圓太郎馬車は送られて火葬場へ行つた。二里餘りの道中を絹帽を被つた會葬

者がぞろぞろと續いた。路傍の見物人は、まるで名士の葬式にでも出合ったやうに、叮嚀に帽子を脱いでお辭儀をしたといふ事だ。

日本では往時から文塚、筆塚、針塚といったやうな物があつた。東京新聞の漫画家が寄り集まつて、島田三郎氏の漫画葬式をやつたのも面白い企てであつた。大阪のやうな土地柄では、名妓の落籍される場合などには、以前の關係筋が寄つてたかつて葬式をするのもまた面白からう。

呂昇の咽喉

耳鼻咽喉科専門醫N氏の説によると、藝妓といふものは、大抵慢性喉頭加答兒に罹つてゐる。それは無理に聲を使ひ、無理に酒や煙草を飲み、無理に夜更しをし、無理な借銭や、無理な戀をするといつた風に、凡てが無理づくめなからださうだ。唄でも歌ふ時は驚のやうに

なめらかだが、話をするとき挽白のやうな平べつたい聲を出すのは、咽喉を病んでゐる證據ださうだ。

N氏は一度呂昇の咽喉を見た事があつた。凡て女の聲帯は細いのに、呂昇のは男と同じ程度に大きく、咽喉もよく發達してゐるが、扁桃腺が非常に肥えて、どんなに眞面目に見ても健全な咽喉とは言ひかねたさうだ。よつぽど扁桃腺を切らうかとも思つたが、その拍子に淨瑠璃を傷つけてもと思つて見合はせたさうだ。素人の淨瑠璃は鼻の先に巢くつてゐるが、呂昇のやうな玄人ののは、何處に隠れてゐるのか、醫者にもちよつと判らないといふ事だ。

雲右衛門の咽喉は、滅茶々に荒れてゐて、聲帯は手のつけやうがない。一體浪花節語りには首を縊められた驚のやうに、一生に一度出せばよい聲を、さらに絞り出すので、誰でもが病的になつてしまふ。

先年大隅太夫が聲が出なくなつて、約束の席に差支へた時、高峰博士のアドリナリン聲帯注射を試みて、無事に席を濟ませた事があつた。これは聲帯の充血を一時的に散らすので、長い効能はないさうだ。

雷

梅雨が明けて雷が鳴る頃になつた。雷といへば上州あたりには、雷狩をして、捉へた奴を料つて食べる土地があるげに聞いてゐる。雷といふのは、多分雷鼠の事で、これを打捨てておくと、芋の根を喰ひ荒して仕方がないさうだ。

不思議なのは、雷狩をした年の夏は、吃度雷鳴が少いといふ事だ。この雷狩は山や野原でするばかりでなく、また海つ邊でもする。雷鼠が、翡翠のやうに寂しい海岸に穴を掘つて、そこから顔を出して遊んでゐるのを漁師が捉へる事がある。

政治家が餘り喋り過ぎて大臣の椅子から滑り落ちるやうに、雷も時たま圖に乗り過ぎて海へ落ちる事がある。さういふ折には漁師が水棹を貸してやらなければ、空へ歸る事が出来ないで、亂暴者の雷も漁師だけにはおとなしいといふ事だ。

京都は三方山に圍まれてゐるので、夏になると雷が多い。空がごろごろと鳴り出すと、京都の女は蠶のやうにぶるぶると身體を顫らせて、水も熱いお茶も飲めない。女は「貴方はん、また雷鳴どつせ、どないしまほ。わてあれ聞くと頭痛がしまつさ。」と言ひ言ひ、嬌へるやうに男の顔を見る。

實のところは、雷は嫌ひでもなんでもないのだ。唯かう言ふと、男の眼に優しく美しく見られるといふ事を、女の本能から知つてゐるのだ。男は鈍なもので、この瞬間女を飛切り美しいものに見るばかりでなく、また自分をも非常な勇者のやうに思ひ違へをする。

京川の水

むかし京都で物好きな男が三四人集まつて、鴨川のほとりで茶を煎じて遊んだことがあつた。(菅茶山が言つたやうに、京都は物靜かで遊ぶには持つて來いの土地柄だが、とりわけ茶

を煎じるには一番都合がよい。

水の講釋にかけては、人一倍やかましい茶人達の事とて、あつちこつちの名水を瓶に入れて各自に持ち寄りをする事にきめた。で、集まつた水をひとつひとつ煮て味はつてみたところ、やはり賀茂川の水が一番うまかつたさうだ。

ある通人がそれを聞いて言つた。

「尤も至極の事で、他所の水は、瓶に貯へて持ち寄りをしたのだから、時間が経つて死水しすいになつてゐる。賀茂川のは汲み立てだけに、水が活きてゐる。うまいに不思議はない筈だ。」

久保田米僂は、大阪の鱧も、京都へ持つて来て一晩賀茂川の水に漬けておくと、吃度味がよくになると言つてゐたが、米僂は私に一度も鱧の御馳走をしなかつたから、嘘だか本當だか保證する限りでない。

京都俳優の隨一人阪田藤十郎は、よく江戸の芝居へも出たが、その都度江戸の水はまづぐて飲めないからと言つて、わざわざ飲み馴れた京の水を幾つかの大樽に詰め込んで、江戸まで持ち運んだものださうだ。水自慢は標緻しやくと一緒に、自慢する人自身の拵しやうへ物でないだけに

面白く。

親

奥繁三郎氏の母親は九十近くの老齡で、今だに達者であるが、孝行者の奥氏は、東京へでも旅をする時には、一番に母親へ挨拶に行くことを忘れない。すると母親は、きまつたやうに言ふ。

「東京へお行きやす言うて、誰ぞおつれでもおすのかいな。」

「いいえ、私一人です。」

「あんた一人で東京までようお行きやすか。」

母親はもう涙を一杯眼に浮べて、

「繁もかはいさうに、おつれがちつとも出来よらんのかいなあ。」

と、そつと溜息をする。

奥氏はどんな旅行をするにも、母親の前では吃度、

「一週間旅へ行つて來ます。」

と言ふ。するとその翌日から、母親はもう、

「繁はまだ歸つて來やはらんかいな。」

と訊くので、

「まだ昨日お發ちやしたのやおへんか。」

と言ふと、

「さうかいな、もう一週間も経つたやうに思へるさかい。」

と、そこらを捜してもするやうにうろろする。

親といふものは有難いもので、神様が人間を罪人扱ひにするのに比べて、親はいつまでもその子を子供扱ひにする。親が神様となつてはいけないやうに、神様も親になつてはいけないが、親には神様が眞似の出來ない長所がある。それは子供の爲には「馬鹿」になるといふ

事で、神様より人間の偉い點は確かにここにある。丁度愚痴を持つてゐる女が、それを持合せない男より強いやうなものだ。

玄 關

そのむかし、池大雅が眞葛原の住居には、別に玄關といつて室も無かつたので、軒先に暖簾を吊して、例の大雅一流の達者な字で「玄關」と書いてあつたさうだ。上田秋成が南禪寺常林庵の小家にも、入口に暖簾をかけて「鶉屋」とたつた二字が認めてあつたといふ事だ。掘ね者の金龍道人は、自宅の入口にしやれた一聯を懸けておいた。聯の文句はかういふのだ。

「貧乏なり、乞食物貰ひ入る可からず。」

「文盲なり、詩人墨客來る可からず。」

乞食物貰ひもうるさくない事もないが、それでも詩人墨客よりはまだまだましな場合が多かつた。何故といつて、乞食は物を呉れてやれば、すなほに歸つて行くが、詩人墨客は自分が納得出来るまで無駄話を押しつけないうちは、滅多に歸らうとしなかつたから。

自分の知つてゐる某氏は、他人の家へ出入をするのに、がらりと入口の扉をあけはするがその手で滅多に締めたことがない。もつともこれは主義のあることで、自分が出入するのに扉は是非あけなければならぬが、それを締めなければならぬ何等の理由も發見出来ないからださうだ。かういふ來客にとつては、大雅や秋成のやうな暖簾の玄關は手数がかからないで
らさ。

墓 石

亡くなつた市川齋入は茶人だけに、紫野の大徳寺にある千利休の塔形の墓石にひどく感心

をして、

「成程、あの墓石に耳をあてがふと、何時でも茶の湯の沸る音がしてまん。私も俳優がひにしゃれた墓石が一つ欲しいおまんね。」

と言つてゐるので、ある人が、

「君は幽霊や宙釣りが巧かつたから、墓石にも一つケレンを仕組んでみたらどうだい。」と冷かすと、

「阿呆らしい。」

と皺くちやな顔を歪めて、少しむくれたさうだ。

だが、それは齋入が物を識らないからで、徳川時代に洒落者の多かつた江戸町人の墓石には、故人が好物の形に似せた墓も少くなかつた。墓好きの墓に臺石を基盤に拵へ墓箆を花立に見立てたのや、酒飲みの墓を徳利形や酒樽形に刻んだのもあつた。可笑しいのは賭博が好きだつたからといつて、墓石に骰子の目まで盛つたのがあつた事だ。

風 藥

蚯蚓が風邪の妙薬だと言ひ出してから、彼方此方の垣根や塀外をほじくり荒すのを職業にする人達が出来て来た。郊外生活の地續き、猫の額ほどな空地に、十歩の春を娛しまうとする花いぢりも、かういふ輩ておやに遭つては、何もかもが滅茶苦茶に荒されてしまふ。

箏曲家の鈴木鼓村氏は巨大胃を有つた男として聞えてゐる人だが、氏は風邪にかかると、五合飯と味噌汁をベケツに一杯食べて、それから平素あまり好かない煙草タバコを暴やけに吸ふのださうだ。

「さうすると、身體ぢゆうの何處にも風邪の匿れる場所が無くなつてしまふ。」

昆蟲學者として名高い、それがためにノobel賞金をも貰つた佛蘭西のアンリ・ファブル先生は、いつも風邪をひくと自分の頭を灰のなかに突込むといふ事だ。すると、ひとしきり

咳が出て、風邪はけろりと癒つてしまふ。

「随分荒療治ですな。」

ある人が言ふと、ファブル先生すましたもので、

「なんでもありません。ちよつと風邪のお葬式をやつたのです。」

賽 錢 百 兩

柳澤淇園は通稱を權太夫といつて、大和郡山藩の一族だつた。多藝な人で、書畫はいふに及ばず、詩文、和歌、俳諧、音曲、天文、數理、醫術といつたやうなものにも精通し、人の師匠として立つに足りる藝が十六もあつたといふ事だ。

すべて藝能のある人には、どうかすると、一人天下で、同じ道に遊んでゐる人の盛名を嫉むのがよくあるが、淇園にかぎつてそんな狭い量見は露ほどもなく、當時の畫家や文人でこ

の人の庇護を受けた向きも少くなかつた。その頃畫家として盛名のあつた池大雅もその一人で、淇園には折にふれていろいろ手あつい友情を受けてゐたやうである。

あるとき、淇園は大雅を自分の屋敷に招いて、畫を描かせた。そして歸るときお禮だといつて、百兩の金を包んだ。その頃の金で百兩といへば大したもの、いつも貧乏で聞えてゐた大雅にとつては、滅多にめぐり合ふことの出来ない「幸運」だつたに相違ない。だが、無頓着な大雅は別に辭退もしないで、そのまま懷中に挟ち込んで、暇を告げた。

大雅は京都へ歸る途中、深草の藤森神社へ參詣した。そして淇園に貰つたばかりの百兩の包を、そのまま賽錢箱に投げ込んで歸つた。

その日の夕方、賽錢を調べようとして箱をあけた神主は、錆ついた散錢の中に、百兩の黄金を見つけて膽を潰さんばかりに驚いた。

「まあ百兩の金……一體誰が投げ込んだものだらうて。」

神主はその百兩の黄金を膝の上へ抱へ込んだまま、いろいろ考へに耽つた。

「ことによると盗人が隠し場所に困つて、ちよつと忍ばせたものかも知れんて。」

神主はやつとかう思ひついたので、理由を話して役人の手許までその金を届け出た。

役人の手で方々取調べた結果、その金包は池大雅が柳澤淇園から貰つたものだといふ事が判つた。暢氣で無頓着で名高いこの畫家は、役人の前へ呼び出された。役人はその金包を大雅に見せた。

「はい、それは私が、柳澤權太夫殿から受取つた潤筆で、藤森の社でお賽錢に奉納したものに相違ございませぬ。」

大雅は答へた。役人は胡散さうに眼を光らせた。

「しかし、百兩といへば大金ぢや。賽錢にはちと多過ぎるやうぢや。」

「かも存じませんが、しかし百兩の金を懷中にしてゐたのでは、私も少し重すぎるものでございませぬ……」

大雅はけろりとした顔でかう答へた。

狸

中橋徳五郎氏は頻りと狸の焼物を集めてゐる。京都の高臺寺焼を初め、いろんな瀬戸物屋へ自分で出掛けて行つて、狸だと見ると、値段を問はず買ひ込んで來るので、今では百幾つも溜つてゐるといふ事だ。

成程よく見ると、中橋氏の顔はどこか狸に肖たところがある。さういつたところで、何もむきになるにも及ぶまい。

中橋氏は實業家（氏は今ではもう政治家の積りかも知れない。ちやうどやごが鹽辛蜻蛉になつたやうに）にしては珍しく書物を読むが、狸にしても文字をよく知つてゐるのがある。

むかし植木玉厓の親類に居た狸などは、そのいい例である。

この狸は家の者の見ぬうちに、下手な字で障子襖に皆の棚下しをしたものだ。

「誰こわくない。誰少しこわい。」

といつたやうな調子で。ある時來客がその噂を聞いて、能勢の黒札を狸が怖がる話をするといつの間にか後の障子に、

「黒札こわくない。」

と書いてあつたさうだ。

その家の女房が、芝居の八百藏が大の最員だつたが、そのころ不入續きで悄氣てゐると、狸は、

「八百藏大へいこ。」

と書いて、すましてゐたさうだ。

中橋氏の狸も、例の金澤の選舉無効を聞いて、

「徳ちゃん大へいこ。」

と書くくらゐの洒落氣はあつてもよからう。

節用集を食ふ

前に七十三の老齡まで、女遊びをしたといふ西依成齋の事を書いたが、成齋の生れた家は熊本在の水呑百姓で、両親は朝夙くから肥桶を擔いで野良へ仕事に出たものだ。

そんな間に育ちながら、成齋は野良仕事を助けようとはしないで、日がな一日青表紙に齧りついてゐた。親父は幾度か叱り飛ばして、やつと芋畑に連れ出しはしたが、成齋は颯のやうにいつの間にか畑から滑り出して、自分の家に歸つてゐた。百姓だけに、土地になじまぬ草は引っこぬいて捨てるものと思ひ込んだ親父は、たうとう成齋を家から放り出すことに決めた。

成齋は泣く泣く家を出たが、それでも出かけに節用集一卷を懷中に挟ち込む事だけは忘れなかつた。節用集といつただけでは、今時の若い人には判らないかも知れない。ある大學生

が國史科の教授に、

「先生、赤穂義士の仇討といふのは、一體京都であつた事なんですか、それとも東京なんですか。」

と訊いた事があつたといふ程だから、節用集といふのは、今の小百科全書の事だと言ひ添へて置きたい。

成齋はその節用集を抱へ込んで、狗兒のやうに鎮守の社殿の下に潜り込んだ。そして節用集を読み覺えると、その覺えた箇所だけは紙を引拗つて食べた。書物を読み覺える頃には、腹もかなり空いてゐるので、節用集はそのまま飯の代りにもなつた譯だ。で、十日も経たぬ間に、たうとう大部な書物一冊を食べてしまつたといふ事だ。

灰屋紹益は、自分が生命までもと思ひを掛けた吉野太夫が死ぬると、その骨を墓のなかに埋めるのは勿體ないからと言つて、酒に混ぜてすつかり飲み盡してしまつた。

だが、かういふ事は餘り眞似をしない方がいい。今時の書物は鵜呑みにすると、頭を痛めるやうに胃の腑をも損ねる。それから女の骨を飲むなどは以ての外で、忌明に筆筒の抽斗か

ら亭主をこき下した日記を発見したからといつて、一度嘸み下した後では、どうとも仕兼ねるではないか。

そして、そんな女など居ないと誰が請合ふ事が出来るのだ。たつて嘸みたかつたら、三回忌を過ぎてからでも遅くはない筈だ。

角田川

大阪美術倶楽部で催された故清元順三の追悼會に、家元延壽太夫が順三との幼馴染を懐ひ出して、病後の隻れにも拘らず、遙々下阪して來たのは美しい情誼であつた。

延壽太夫はその席上で、「角田川」を語つた。清元としてはひどく上品なもので、何も判らない聴衆は、何れも手を拍つて喜んでゐたが、自分は獨り欺かれたやうな氣持がしないこともなかつた。

意氣で、うまみで持つてゐる清元を、しひて上品にねぢ曲げようとするのは寧ろ當流音曲の自殺である。四代目お葉は、二代目の不思議な横死が富本の手で行はれたかも知れないといふ疑ひ一つで、富本の紋章に縁のある櫻の花は、生涯家に植ゑさせなかつた程だ。家の藝が自分で首を縊らうとするのを見たら、どんなに言ふだらう。

先代の延壽は道樂といふ道樂を仕盡して、とどの果てには舌切情死までしようとした。さういふ遊蕩的分子をその血にたんと持ち傳へてゐたから、舌切雀のやうに情死で損じた舌をも、どうにか工夫して獨吟となると、聴客の魂を吸ひつけるやうな離れ業が出来たのだ。清元に無くてかなはぬものは、この遊蕩的分子である。

今の家元は、所謂上流夫人といふ階級の氣に入らうとして、清元を「角田川」のやうなお上品なものにしようとしてゐる。今の上流夫人の好くものは、お手製の西洋菓子と、オペラ袋と、新音曲と——いづれもお上品で軽い物づくめである。

もつと善い物

ある小説家が歐羅巴漫遊の途に上つた時、その小説家と顔馴染の某といふ出版業者は、行く路すがらの観光記の原稿が貰ひたさに、わざわざ見送るのだといつて、神戸から門司までその小説家と一緒に薄穢い汽船の三等室に乗り込んだ。

船が播州沖を出かかると、色々の世間話にとり交せて、それとなく原稿の事を切り出してみると、小説家は圓い色眼鏡の奥から、じろじろ出版業者の顔を見つめた。彼は魚のやうな冷い顔をしてゐた。

「原稿も原稿だが、それよりももつと善い物をあげよう。」

小説家はこんなことを言つて、立ち上つて甲板へ出た。

出版業者は一刻も早くその「善い物」が見たさに、後から躓いて甲板に出た。船の前には

捻つて投げつけたやうな島が幾つか轉がつてゐた。小説家はちよつと後を振り向いて見て、「さう景色ですな。」

と言つたきり、大きな腕を胸の上で拱いて、大股にそこらを歩き廻つてゐたが、いつの間にか姿が見えなくなつた。

出版業者は慌ててまた船室へ歸つてみた。小説家は薄暗い室の隅つこで、膝小僧を抱へ込んでまま、こくりこくりと居睡りをしてゐた。附近には見すばらしい荷物が一つきりで、何處にもその「善い物」は見つからなかつた。

船が門司に着かうとする時、出版業者はそれとなくまた原稿の一件を切り出して見た。すると小説家は急に思ひ出したやうに、

「さうでしたつけないや、原稿も原稿だが、それよりももつと善い物をあげよう。」と、また同じ事を繰返した。

「原稿より善い物つて何ですか。」出版業者は直ぐに訊きかへした。

「信仰です。」と小説家はトルストイのやうな口許をしてきつぱりと言つた。頗るトルスト

イのやうなもじやもじやした鬚のないのが口惜しかった。

「先づ神をお信じなさい。その外の事はみんなつまりません。」

出版業者は眼を圓くして小説家の顔を見た。そして鸚鵡返しに、

「先づ原稿をお呉んなさい。その外の事はいづれ考へてからにしませう。」

と言ひたかつたが、相手を怒らせてもと、そのまま別れて小蒸汽船に乗つた。

鰻の畫

畫家T氏の許へは、色々の人が畫を頼みに来る。ある時すんぐり肥つた、鼻先の酸漿のやうに赤い男が玄關に入つて來た。

「一つ畫がお頼み申したくて上りました。お差支がなかつたら、ちよつくら先生にお目に懸りたいもんですな。はい、ちつとばかり註文がございますんで……。」

その男は出来るだけ言葉を叮嚀にしようとして、やつとこれだけの事を言つた。T氏は、客を座敷に通して、その註文といふものを訊いてみた。客は酸漿のやうな鼻先に大粒の汗をかいてゐた。

「ほかでもありません、註文と申しますのは、海の中にかう島が二つ並んでるところなんですな、島が二つ……。」

客は大きな握り拳を二つ自分の鼻先に並べてみせた。

「成程島が二つ……。」T氏はコロッケのやうな島を二つ目の前に描き出した。「ところで、その島には松でも生やすのですか。」

「はい、松でも、櫻でも、それとも玉蜀黍でも一向差支ありません。」客は平氣な顔をして言つた。「さうして、その二つの島の向うに初日の出の見えるところを描いていただきたいのです。」

「島が二つ並んで、向うに初日の出……すると先づ、二見ヶ浦といったやうな所なんですね。」

「はい、その二見ヶ浦なんで。」

客は立て續けに二度ばかりお辭儀をした。そして禿げかかった額際を暴に搔きながら「その二見ヶ浦の真中から、海老が頭を出して、日の出を拜んでるところを描いていただきたいんですがね、如何でせう、御都合は。」

「海老が日の出を拜んでる……ははは。」T氏は覺えず噴き出した。「貴方は商人さんのやうにお見受けするが、何の御商賣かな。」

「へへ……」客は海老のやうに腰を屈めて恐縮した。「實はその先生、私どもの職業は天麩羅屋なんでしてね。」

天麩羅屋だと聞いては拒むわけにもゆかなかつた。T氏は海老が日の出を拜んでる繪を描いてやつた。——海老を文展の審査員の似顔に描いたかどうかは知らない。海老と審査員と——強い者の前では、どちらもよく腰を屈める術を知つてゐる。

畫の催促

流行兒の畫家が容易に繪を描いて呉れないのは、昔も今も同じ事だが、京都のT氏などになると、頼み込んでから、十年近くなつて、今だに描いて貰へないのがあるさうだ。

さういふ向きは、いろいろ手を變へ品を更へて、時機さへあれば繪の催促をするのを忘れない。到來物の粕漬を送つたり、掘り立ての山の芋を寄したりして、その度にちよつと繪の事をも書き添へておくが、畫家といふものは忘れっぽいものと見えて、粕漬や山の芋を食べる時にはつい思ひ出しもするが、箸を下に置いてしまふと、今の好物も誰が送つて來たものか、すっかり忘れてしまつてゐる。

畫家の胃の腑が當てにならない事を知つた或る依頼者は、妙な事を考へ出した。それは畫の催促に出掛ける折には、妙齡の娘を一人連れて行くといふ事だ。

「先生、畫をお頼みしてから、もう十年になります。實はこれが嫁入の引出物にといふ積りで、夙くからお願ひ致しましたのですが、娘も御覽の通りの妙齡になりました。ついてはこの暮にでも結婚させたいと思ひますが、何卒その所をお掬み取り下さつて……」
かう言つて勿體らしく頭を下げる。

どんな畫家でも、自分が物忘れをしてゐるあひだに、稚兒輪が高島田になつたと聞くと、流石にちよつと變な氣持もする。とりわけ襖越しにそれを聞いてゐる畫家の女房は、ついに詰まされてほろりとする。女房の口添は、畫家の忘れ物を直ぐ思ひ出させる効力があるものだ。

「まあ、お氣の毒ですえなあ。宅で忘れとる間にあない大きうおなりやしたのやさうです。描いてお上げやすいな、早う。」

「さうだつてなあ、大急ぎで一つ描くかな。」といふやうな譯で、繪は苦もなく出来る。

その繪を引出物に、娘もめでたく興入を濟ませたらうと思つてゐると、つい鼻の先の新畫展覽會に、その繪がたいした値段で賣物に出てゐるのが少くない。なに、引出物の繪は無く

とも娘は結婚出来る世の中である。

それを知つたT氏などは、近頃は娘を連れて來ても、一向相手にならない。そして繪具は高いが、筆筒は安いさうだから、結婚するなら今の間だと教へることにしてゐる。親といふものは、娘の結婚を「妙齡」よりも、筆筒の値段で決めるものだといふことをよく知つてゐるから。

長命の秘訣

人間は道德的でなければならぬといふことをよく聞く。ほんたうにさうで、人間は兎も角も道德的だけではあつて欲しい。道德的といふのは、借りた金銭をきちんと期限どほり返すとか、電車のなかで婦人客に席を譲るとかするのを言ふのではない。道德といふのは、自身に對すること、まあ、手つ取りばやく言つたら、自分の身體を健康にすることから始

まるのだ。

身體を健康にするには、いろいろ方法があるが、そのなかで一番簡便で、一番効力があるのは、結婚をする事だ。實際結婚は健康の祕法ともいふべきもので、餘り懇意でない人にはおいそれとこんな祕法を言つて聞かせるのは惜しいくらいなものだ。

ある統計家の調べたところによると、七百四十三人の男の狂人のなかで、結婚した男の數二百一人に對して鰥夫は五十人、未婚者は四百九十二人といふ比例を示してゐる。また他の人の説によると、自殺をする人の三分の二、どうかすると四分の三までは大抵未婚者だといふ事になつてゐる。

してみると、道德的といふ事は案外楽なもので、結婚さへすればそれでいいといふ事になる。物價が高くなつて算符の値段は三割方張るかも知れないが、道德的だと思へば我慢の出來ないこともない。先づ何を差措いても結婚することだ。

また或る學者の説によると、結婚すると男は五年、女は四年だけ壽命を延ばすことが出来るさうだ。物好きな研究家（研究家といふものは、物好きと麵麩と水とだけで生きてゆかれ

る安價な人間である）が、あるとき結婚が壽命にどんな關係があるかと、十萬の死亡者を調べた事がある。その結果で見ると、二十歳から二十五歳までの間で、有配偶者の死亡數五七七に對して、無配偶者は一、一七四。二十五歳から三十歳までの間で、有配偶者の死亡數八六四に對して、無配偶者は一、三六九。三十歳から三十五歳までの間で、有配偶者の死亡數九〇七に對して、無配偶者は一、四七五。それからずつと飛んで八十歳から八十五歳までの間でも、有配偶者の死亡數一七、四〇〇に對して、無配偶者は一九、六八八といふ比例を示してゐる。

道德的であつて、おまけに壽命が四つも五つも延びるといふ祕法だと聞いては、誰だつて結婚せすにはゐられない筈だ。だが、たつた一つの困りものは、結婚には相手が要るといふ事だ。男とそして女——なんといふ見すばらしい相手であらう。相手が無くて濟むのだつたら、結婚は理想的である。

隈侯の進物

大阪にNといふ婦人の實業家がある。いつだつたかその婦人が大隈侯を訪問すると、侯は持合せのお世辭を灰のやうに婦人の頭から浴びせかけた。内氣者のお客が、酒にでも食べ酔つたやうな、ほつとした氣持で辭して歸らうとすると、侯爵は、

「ちよつと待ちなさい。」
と呼びとめた。

女實業家は女奇術師に習ひ覺えた表情を、出来るだけたつぷり見せて立ち停つた。

「お前、大阪で厄介になつてゐる家が幾軒程あるな。」

女客は變な事を訊かれるものだと思つたが、直ぐ考へて返事をした。

「はい、お世話になつてゐる家と申しますと、ざつと七軒もございませうか。」

「七軒か、よしよし。」

と言つて、侯爵はそこにゐた小間使を見てちよつと顎をしゃくつた。小間使は急いで次の室に入つたかと思ふと、手巾の箱を七つ持つてまた出て來た。侯爵はそれを女客の方へ押しやつて、

「これをその人達へ土産にきなさい。私に貰つたと言つて。それから……」
と、侯爵はまた卓子の上にあつた一冊の書物を手渡しした。

「これはお前に進ぜる。」

女實業家は叮嚀にお辭儀をして歸つて來た。そして侯爵がわざわざ自分にと言つて手渡しして呉れた本を取出してみた。本といふのはイブセンの『ノラ』の翻譯だつた。女實業家は『ノラ』の名前は一度聞いた事はあつたが、それは松井須磨子のお友達で、人形屋の女房で、借金で亭主と喧嘩をして家を飛び出した女だからに覺えてゐるのに過ぎなかつた。だが、侯爵からの進物だといふので、幾度か繰返して讀み直した。

大隈侯の考へでは、ノラのやうな女になれとでもいふのかも知れなかつたが、女實業家は

今では寡婦の身分で、喧嘩をしようにも肝腎の亭主がない。そしてその上にも物足りない事は借金が無いといふ事だ。凡そ富豪にとつて何よりも不満足なのは借金の無いといふ事で、彼等はそれがあつたら、大喜びで七倍にして拂ふ事を心掛けてゐる見え坊である。

就職口

ある文科大學の卒業生が就職口に困つて、その周旋方を某博士に頼みに行つたことがあつた。博士はその朝何處かの新聞の新刊紹介欄で、自分の書物を褒めた記事でも讀んでゐたかして、大分機嫌がよかつた。

「うむ、君一人くらゐだつたら、どうにかならん事もなからう。今日はまあゆつくり遊んでゆくさ。」
と言つて、いろいろ世間話をし出した。

ひとしきり世間話がはずむと、博士は、

「ちよつとこちらへ蹤いて來たまへ、君にはまだ自分の書庫を見せなかつたね。」

と、わざわざ立つて自慢の書庫へ案内してくれた。大學でも書物好きの友達を捜し出す時のほかは、滅多に書庫に入つたことになかつたその男は、ちよつと厭な顔をしたが、それでも不承々に蹤いて行つた。

薄暗い書庫のなかには、色々な書物がさつと一度に猫のやうな金色な眼を光らせて、この昵懇のないお客を見つめた。博士は「眞理」を掴むために、特別に拵へさせたらしい脂つ氣のない手で隅の方を指さした。

「あすこが哲學、それから文藝、神學——まあ、東西古今の書物で目ぼしいものだけは、残らず集めてあるがね、困つたのは火事だて。」博士はちよつと眉を擡めて、「實際火事には困る。他の家財はみんな焼いたつて構はないが、この書庫だけは失くしたくないからな。」と心配さうに言つたが、ふと氣がついたやうに後を振りかへつて訊いた。

「君達はまだ書物も格別たまつてゐなからうが、一體書庫はどんな設備にしたものかな。」

「書庫の設備ですか。」と卒業生はついつかり口を滑らした。「そんな物は私達には要りません。讀んだだけの書物はちやんと此處に藏めてありますからね。」と調子に乗つて雲脂だらけな頭を指さした。だが、眞實の事を言ふと、その頭の中には探偵小説の二三冊と、女の手紙と、誤譯だらけのタゴオルの哲學がごつちやになつてゐるに過ぎなかつた。

博士はそれを見て「ふふ」と言つて、不機嫌な顔をしたが、座敷に歸るなり相手の頭を見下して、

「就職口と言つたところで、何處にも椅子を空けて、君なぞ待つてゐる處はないんだから、自分にもせつせと捜さんければいかんよ。」と素つ氣なく言つた。

象山と江川

幕末の偉物、江川太郎左衛門が狩獵好きであつたのは名高い話だ。閑さへあると、手製の麵麩を腰にさげて（太郎左衛門はまさかの時、米の飯などはまだるつくくてたまらないからと言つて、わざわざ麵麩を焼く法を習ひ覺えたものだ。）狩獵に出掛けた。

齋藤彌九郎だつたか「江川のは狩獵が好きなのぢやない、あれは病氣なのだ。病氣にもいろいろあるが、わざわざあんな殺生病に罹るなど氣の毒なものだ。」と言つたといふ事だが、實際江川の狩獵好きは病氣の方に近かつた。

ある時佐久間象山が、何かの用事で太郎左衛門を訪ねて來た事があつた。話は手つ取り早く済んだ。

すると、太郎左衛門は直ぐに立ち上つた。

「折角のお越しぢや、これから一緒に猪獵に出掛けようぢやないか。」

「そら、おいでなすつた。」

象山はさう思つて、馬のやうな長い顔でにやつと笑つたが、利かぬ氣の男だけに直ぐに承知をした。

「それぢやお伴するとしようかの。」

煽て好きで、理窟屋の象山は、鐵砲打の術も、理窟の上ではなかなか精しかつた。

「太郎左衛門が巧いたつて、どれ程の事があらう。今日は一つ自慢の鼻を摧いてやらなくつちや。」

こんなことを思ひながら、灌木の林を分けてゆくと、いきなり大きな猪が轉がり出して來た。凡て猪だの、借金取りだのといふものは、どんな場合にも案内なしに鼻先に突つけて來るものなのだ。

象山は慌てて一發切つて放した。彈は撃ち手以上に慌てて、とんでもない方角へ逸れて行つた。すると直ぐ後から、江川がずどんと口火をきつた。猪は急所を撃たれてそのまま平伏

つてしまつた。

「どうぢや、鐵砲はかういつたやうに撃つもんぢやぞ。」

太郎左衛門は自慢さうに聲をあげて笑つた。

その笑ひ聲が少し無遠慮過ぎたので、象山は胸を悪くした。この馬のやうな顔の持主は、馬のやうに白い齒を露き出して笑つたが、心の中では何だか面白くなかつた。——後になつて、象山と太郎左衛門との感情が行き違つたのは、實を言ふと、こんな些細な事が原因になつてゐたのかも知れなかつたのだ。

鼻

アンヌ・ハギランド女史は、もと亞米利加生れで、今は香料師として巴里に名を馳せてゐる婦人である。花畑のなかの一軒家に生れたので、子供の時は、狗兒か蝶々かのやうに色々

の花の中を轉がり廻つて育つたものだ。

で、いつの間にか、花の香を嗅ぐ嗅覺の力がすばらしく發達して、十一二の頃には眼を閉ぢたまんま、花瓣をちよつと鼻にあてがつたきりで、どんな花の名も言ひ當てるやうになつた。

馬乗りの上手な者が馬丁になり、女の手を握る事の上手な男が醫者になるやうに、すべての藝能は、その人に職業を興へて呉れるものだ。アンヌ・ハギランド女史も、鼻がよく利くといふので、ある香料研究所に雇はれて、どうにかその日の糊口が出来るやうになつた。頭と口とは大分道が遠いので、頭では容易に糊口の出来ない世の中だが、鼻は直ぐ近所であるので、口を養ふのには都合がよかつたものと見える。

ある日の事、この娘が研究所の一室で、ラワンデル香水と他の香油とを混ぜてゐる所へ、ぬつと入つて來たのは、佛蘭西の名高い香料師のシヤラボオ博士だつた。博士は一目見て、この娘の鼻が世にも珍しい働きを持つてゐる事を見て取つたので、色々と勧めて、巴里に連れて歸る事にした。

博士のしつけで、この娘は、程なく押しも押されぬ立派な香料師になつた。今では四百種の香料を造作もなく嗅ぎ分け、どんな材料を當てがつても、ちよつと嗅いだばかりで、それから取れる香料を直ぐ判斷する事が出来るさうだ。

この女の說によると、人間にはそれぞれ皆持前の香氣があるといふ事だ。その香氣をうまく利用する事が出来たら、化粧法は一段と進歩する事だらうし、戀をする人達は、さしづめ有力な材料が一つ殖えた事になるわけだ。

ところが、アンヌはその事實から怖い發明を企ててゐる。それは人間の持つてゐる香氣から新しい香料を取らうとする事だ。これが發明出來て、毛むくぢやらの將軍に白粉の香氣がしたり、立派な貴族の夫人に石油の香氣がする事が知れでもしたら、大變な幸福である。何故といつて、その人達は早速自分の香氣を化粧品屋に賣つて、その金で馬券を買ふ事が出来るから。今は靈魂よりも馬券の方が高く取引出来る時代である。

火も亦涼しい

熊本といふところは、海と市街との間に、屏風のやうな山がぬつと衝立つてゐるので、涼しい海の風はそれに遮られて吹いて来ず、夏になると、市街の人はフライ鍋で熬りつけられた肉のやうに、眞赤になつて汗をかいてゐる。

ある夏の事、熊本の縣會議事堂で、釋宗演師の提唱があつた。名高い禪師の事だ、こんな暑さには、何か吃度涼しい話があるに相違ない、ことによつたら、來世で大手をふつて極樂へ通れる紹介状を書いて呉れまいものでもない、色々な連中がぎつしりと會場へ集まつて來た。

その日も蒸暑かつた。すべてに公平なお天道様は、禪坊主が來たからといつて、取つて置きの風を御馳走する程の慈悲も見せなかつた。皆は襟を寬げて扇をばたばたさせた。そして

廣い熊本で難しい、理窟っぽい事の解るのは、先づここに集まつた自分達だけだらうといつたやうな顔をしてゐた。

宗演禪師は嚴つい眼つきで皆を見下した。そして一語一語が五十錢づつの値段でもするもののやうにぼつりぼつりと口を切つた。皆はそれを聴き落すまいと小首を傾げて耳をひつ立てた。禪師の言葉は噛みつくやうに皆の頭の上に落ちて來た。

「要するに、三界は渾てこれ一心ぢや。寒いといふも心、熱いといふも心。心頭を滅却すれば火もまた涼しぢや。」

「火も亦涼しだつて……巧い事を言つたもんだな。成程、さう聞いてみると萬事が心一つだわい。」

皆は感心したらしく肚のなかでさう思つた。そしてそんな有難い「心」といふものを持つてゐる自分達の幸福を思つた——だが、さう思つても、やはり熊本の夏は暑かつた。皆はその暑さを調節するのに、有難い「心」を用ひないで、有合せの扇をばたばたさせた。

氣がついてみると、會場のなかに宗演師一人だけは扇を使はないで、平氣な顔をして椅子

に腰をおろしてゐる。

「やつぱり心一つだ。偉いもんさ、火もまた涼しんだからね。」

皆はかう思つて感心したやうに首を捻つた。――だが、實を言ふと、火もまた涼しかつたのに無理はない。その折襖の陰から、小僧の一人が隠れて両手に大團扇をもつて禪師を煽いでゐただから。

悪戯小僧

アアノルド・デイリイといへば、米國ではちよつと聞えた俳優だが、以前フロウマンといふ劇場監督の小僧を勤めてゐた事があつた。

善い小僧をさがすのは、善い主人を捜すよりもつと難しい。善い主人に出合つた小僧は無論仕合せには相違ないが、善い小僧に出合つた主人の仕合せとは比べものにならない。

アアノルド・デイリイは無論善い小僧に相違なかつた。何故といつて彼は時々主人を訪ねて來るお客に悪戯をする事を知つてゐたから。人間といふものは、應接間の一つもつやうになると、小猫や狎を飼ふとか、掘出し物の骨董を並べるとかして、兎角お客に戯れをしたがるものなのだ。狎や骨董が見つからない場合、その代りとして小僧を使つたところで少しも差支がない。

ある時――正しく言ふと、六月の或る日だつた――ルイズ・ヘエルといふ女優が、フロウマンを訪ねて來た。玄關に出て來た悪戯小僧のデイリイは、女客の顔を見ると口を窄めて挨拶をした。

「おあいにくさま、旦那は居ませんよ。」

「さう。」と女優はちよつと困つたらしい顔をしたが、「それぢや暫く待たせて貰ひます、よくつて?」

「ええ、お好きなやうに。」

小僧は相手を應接間に案内して次の室に引き下つた。そして讀みさしの『ロビンソン漂流

記』を膝の上にあけながら、こんな離れ島に住んでゐたら、うるさい女優のお客も来なからうかなどと考へてゐた。

女優が待つてゐる間に、應接間の置時計は三度ばかり當てつけがましく時を打つた。いくらか艶れ氣味になつた女優は、険しい眼つきをして次の室に顔を出した。

「小僧さん、あなた御主人がいつ頃お歸りになるか、御存じぢやなくつて。」

小僧は『ロビンソン漂流記』の上から、重さうに顔を持ち上げた。

「ええ、お歸りは九月の初旬頃だつて承つてゐますよ。」

「なんですつて、九月の初旬……。」

女優は自分の耳を疑ふやうに戸を押しあけてすつと入つて來た。も一度言つて置くが、その時は丁度六月であつた。小僧は變もない顔をして言つた。

「ええ、九月の初旬です。何しろ倫敦におたちになつたんですからね。」

黒ん坊の教會

米國の南の方の州から選出せられて、下院議員になつた田舎政治家があつた。その政治家が初めてワシントンへ出掛ける時、夫人は叮嚀に襟飾の歪んだのを直してやりながら、子供に教へるやうに言つて聞かせた。

「あなた、くれぐれも言つておきますが、日曜日には忘れないやうに吃度教會へいらつしやうよ、ね、よくつて。」

「うむ、行くとも、吃度行くよ。」

田舎政治家は素直に頷いてみせた。それを聞くと、夫人はやつと安心したやうに良人を手離した。女の氣になつてみれば、旅で自分の代りに良人の面倒を見て呉れるのは、神様の外には誰一人居なかつたのだ。それは眞實の事に相違ないが、もつと眞實なのは、神様に預け

た方が一番無難なからだった。男といふものは、既へ預ければ馬に蹴られるし、女部屋へ預ければ魂を抜き取られるし、女房の手に歸つて来る折には、十が八九傷物になつてゐるものだから。

代議士は、ワシントンで田舎の町では見られなかつた色々の珍しいものを知ることが出来た。で、日曜日が来ても、教會へはとんと御無沙汰ばかりしてゐたが、それでも國許の夫人へ出す手紙には、きまつたやうに、

「日曜日には、教會にて素晴しきお説教を聴き申し候……」
と書くことだけは忘れなかつた。

二ヶ月程すると、夫人がだしぬけに訪ねて来た。代議士は廣い世界が急に眼の前で巾着のやうに狭くなつたやうに思つた。で、旅宿の一室で出来るだけ小さくなつて、溜息ばかり吐いてゐると、次の日曜日の朝、夫人は金絲雀のやうな聲ではしやぎ出した。

「さ、早くお顔を洗つてらつしやい。そして今朝は教會へ連れてつて下さるんですよ。ほらあなたがいつも素晴しいお説教を聴いたとおつしやつたね、あの教會ですよ。」

田舎代議士は、はつと思つて弾かれたやうに飛び起きた。そして両手で頭をひつかかへたまま、

「さあ、ことだ。教會つて、どこにそんなものがあつたらうな。」

と、自分のほつつき歩いた首府の町々を、電車よりも速い速力で頭に描いてみた。馴染の酒店や珈琲店は、派手な百貨店と一緒に、ワルツでも踊るやうに陽氣に頭の中を過ぎて行つたが、教會らしいものの影は見えなかつた。

やつと暫くして、代議士は議事堂への通り路に、見すばらしい小さな教會がある事を思ひ出して、ほつと息をついた。

「それがお前、見掛けは餘り立派な教會ぢやないんだよ。」

代議士は夫人を連れてその小さな教會へ入つて行つた。少し早目だったので、二人は一番前の椅子に腰を下した。暫くすると、ぞろぞろ信者の入つて来るらしい靴音がした。その度にうしろを振り向いてゐた夫人は、

「あなた、ほんたうに此處なの、これまでいつもいらしたていふのは。」

「さうだよ、ほんたうにここだよ。」代議士は陣痛でも起きたやうな聲を出した。「だつて訝しいわ。」と夫人は不機嫌さうに呟いた。「御覽なさいよ、来る人も来る人も黒ん坊ばかりよ。あなた、ここは黒ん坊の教會ぢやなくつて。」

物識り娘

キンストン・チャアチルといへば亞米利加の小説家だが、ある時、何かの席で紐育の富豪のお嬢さんと隣合せて坐つた事があつた。そのお嬢さんは財布には金貨を、口にはお愛想をたつぷり持合せてゐるのを自慢にしてゐる性の女であつた。

お嬢さんは、自分の側にゐる紳士が、名高い小説家であるのを聞くと、何か文學上の話をしなければならぬものとも思つたらしかつた。まことに立派な心掛けで、日本の社交的婦人が、隣に名高い詩人がゐようと、天文學者がゐようと、または神聖なる猫がゐようと、

そんな事に頓着なく、新式の襦袢や婦人會の話を持出すのとは比べて大變な相違である。

だが、實を言ふと、そのお嬢さんは女學校で習つたもの以外には、その後餘り難しい書物を読んでゐないらしかつた。女といふものは鼠と一緒に、よくよく食物が見つからない時でなくつちや、滅多に書物など齧らうとはしないものである。お嬢さんは女學校でスコットの物を一二冊讀んだ事があつた。スコットは學校を出てから、餘り書物を讀まない人達にとつて、いつまでも立派な友達である。

お嬢さんは嬌態を作つて小説家に話しかけた。

「先生、あなたはスコットの物はお好きでいらつしやいますか。」

「好きですよ。貴方は？」チャアチルは愛想よく言つた。

「まあ、嬉しい。先生もお好きでいらつしやいますの。私もう崇拜しきつてるんですわ。」

小説家はこの若い娘が、内々自分をスコットの描いた山國のお姫様に擬へてゐるらしいのを見て取つた。

「湖上の美人——あれはどうです、いい詩だとはお思ひになりませんか。」

「傑作ですわ、エレン姫の美しいこと……」お嬢さんは、自分を姫に肖てゐるとでも言つて貰つたら、代りにスコットの借金くらゐ拂つてもいいやうな顔をした。

「それではマアミヨンは。あの詩をどうお思ひですわね。」チャアチルは魚を釣るやうな氣持で訊いてみた。

「氣に入りましたわ。」お嬢さんは、自分をさも書物好きであるらしく吹聴したかつた。「わたしあの書物を確か十二度も読み返しましたつけ。」

「十二度？」小説家は吃驚したやうに言つた。そして次の瞬間には何だか嘘らしく思つたので、調弄氣味に訊いてみた。

「さや The title mart はどうですわ、スコットの……」

「あ、あれですか、あれも三度ばかり読みましたつけ。」

その書物こそ、つい前の年チャアチル自身が公にした脚本であつた。

馬具屋

トオマス・リイドといへば、米國ではひとしきり鳴らした辯護士出の政治家で、共和黨の闘士として議院で随分雄辯をふるつたものだ。

そのリイドはおそろしく身體のがつしりした、とりわけ首根つこの太いので名高い男だ。リイドがその太い咽喉元から喇叭のやうな聲を出して演説でもすると、

「奴さん、まるで牛のやうな咽喉をしてゐるぢやないか。これぢやとても敵ひつこはない。」と、反對派の代議士は、自分達の議席で鼠のやうに小さくなつて悄氣たものだ。

一體咽喉が太いのは、餘り見つともよいものではない。呂昇なども、女義太夫としては外貌もよし、聲もよいが、平常咽喉を使ひ過ぎる故で、首が棒つ杭のやうにがつしりと肥つてゐる。見てゐても醜いが、とりわけ戀人の身にでもなると、吃度うんざりするに相違ない。

自分は女と生れて雄辯家のリイドの女房にならなかつたのを喜ぶと同時に、男と生れて呂昇の戀人とならなかつたのを祝福せぬわけにゆかない。

そのリイドが、ある時、襟クラを買ひに通りすがりの雑貨屋へ入つて行つた。

「襟を見せて下さい。」

リイドは汗ばんだ咽喉をくしゃくしゃの手巾で拭きながら言つた。

「はいはい、襟でございますか、大きさはお幾らで？」

雑貨屋の番頭は愛想よく訊いた。

「十九吋。」

この雄辯家はいくらか気がひけるやうに低聲で返事した。

「十九吋！」番頭はじつと客の咽喉を見つめてゐたが、暫くすると、「手前にはあいにく持合せがございませんが、これから三軒目を尋ねていらつしやい、恰好のが見つかるでせう。」

リイドは太い首根つ子を眞直ぐに肩の上におつ立てて、三軒目の店を覗いてみた。そこは紛ふ方もない馬具店であつた。この共和黨の辯論家は店の闕に衝立つたまま、暫くは馬のや

うに眼を白黒させてゐた。

水神へ供物

むかし支那に王榮老といふ男がゐた。旅先から故郷へ歸らうとして、大河の岸まで來るとひどい風で浪は馬のやうに躍つてゐて、なかなか渡し船などの沙汰ではなかつた。王榮老は荷物を横抱きにぶつぶつばやきながら、河つ縁の宿屋に入つた。

王榮老は七日夜の間待つてみた。が、風は少しも衰へなかつた。すると八日目の朝、鬚の白い宿屋の主人がひよつくりと座敷に入つて來た。

「なんてまあ意地くね悪い風なんでせう、全くお察し申しますよ。」主人は胡散さうな眼付をして室の片隅に押しやつてある客人の荷物を見た。「かう言つちやなんです、もしや貴方さまのお荷物に、何か大切な物があつて、水神様がそれを欲しがつてるのぢやありませんま

「か」

「成程な……」客人はちよつと考へるやうな眼色を見せたが、暫くすると、そろそろ荷物を解いて、なから立派な拂子を取出した。拂子は一度それを振ると、大抵の邪念は蛇のやうに飛んでしまひさうに思はれた。「ぢや、これを差上げるとしよう。掘出し物なんだが、まあ仕方がない。」

王榮老は拂子を河に投げ込んだが、風は少しも衰へなかつた。怨の深い水神様は、もつと外の物を欲しがつてるのかも知れないと、氣の毒な旅人は、荷物の中から虎の皮の弓囊を取出して、惜しさうにそつと河に落してみた。弓囊は高い金を拂つて、やつと手に入れた品だつた。

だが、風は少しも弱みを見せなかつた。王榮老は顔を歪めて、べそを掻いてゐたが、暫くすると、また荷物の一番底から、黄魯直が草書でかいた扇面を一つ取出した。そして風邪をひいたやうな聲をして、

「水神め、こんな物のある事までちやんと知り抜いてるんだな。」

と言ひ言ひ、河の中へそれを投げ込むと、急に風が収まつて、空も河水も鏡のやうに靜かになつた。榮老はお蔭で無事に向う岸に渡る事が出来た。

珍 書

コロムビア大學のブランドア・マシウス教授が、ある時、宴會の席上で一つの難しい問題を持出した。宴會といふのは、マシウス教授が主人役で客を饗應したといふ意味ではない。大學教授は米國でも日本と同じやうに、さうさう御馳走をするものではない。

教授は食卓の上の一番うまさうな果物を手に執つた。そしてそれを皆に見せびらかしてお

「皆様、二百年ばかり前に出来た書物で、それ以來、ラテン語、希臘語、ヘブリウ語といつたやうな古代語にも翻譯されれば、一方ではまた現代の各歐洲語は無論の事、アラビヤ、ペ

ルシヤ、支那、日本といつたやうな東洋語にも翻譯されてゐるのがあります。その書物の名は何でせう。巧く言ひ當てた方には、この果物を褒美として差上げませう。」
 と言つて、居合はす皆の顔を見た。

食卓の向うから、女の黄いろい聲が聞えた。

「先生、エスペラントでも翻譯がございませうか、その書物は。」

その聲の持主は、エスペラントで戀文でも書きさうな女であつた。

「無論あります。」とマシウス教授は皮肉に答へた。「恐らくエスペラントで最初に翻譯された小説でせう。だが、小説といつても、その書物には男女の情事はこれつばかりも載つてゐませんよ。」

「さあ何だらうな。小説といつたら僕は随分讀むには讀んだがね。」酒肥りにでつぷり肥つた紳士は、教授の掌に載つた果物を見ながら言つた。「無論聖書ではあるまいし。」

「ことによつたら、イソップかも知れませんよ。」

銀行の頭取らしい男は、探るやうな眼つきをして、教授の方を見た。この輩は聖書もイン

ツプも同じ小説で、二百年前に出来たものとも思つてゐるらしかつた。

皆は御馳走で充くちくなつた腹を抱へて、めいめいじつと考へ込んでゐたが、どうしてもそれらしい書物が思ひ出せなかつた。マシウス教授は可笑しさうにくすくす笑ひながら、

「判りませんか、判らなきや言ひませう。『ロビンソン・クルウソウ』ですよ。さ、その代りこの果物は私がいただきます。」

と言つて、そのまま小刀を取つて外皮をむき出した。皆は呆氣にとられて互ひに顔を見合はした。

越路の「山科」

越路太夫は、文樂座の十一月興行に「忠臣藏」の九つ目を語つてゐる。立派な出来で、この語物一つで初日以来座は毎日のやうに大入りを續けてゐる。

二三年前、同じ座で越路が同じ九つ目を語つた事があつた。その折越路は自分ながら物足りない點があつたので、早速師匠攝津大椽の許に駈けつけた。藝人といふものは、罪のないもので、夫婦喧嘩をしたり、批評家とか蜂とかに螫されたりすると、直ぐに師匠の許に駈けつけようとする。師匠は師匠で、そんな折に餘り害にならない好い藥を幾種か持合せてゐるものだ。

越路は大椽に向つて言つた。これまで幾度か師匠の九つ目を聽いて、結構な出來だと思はぬ事はなかつたが、さて自分が語つてみると、戸無瀬も本藏も初めから鯨子張つて、まるで喧嘩を賣りに來たやうにしか見えない。

「どこの工合だつしやろ、ねつから工夫が附きまへんよつて。」

と言つて、胡麻鹽の頭を几帳面に下げた。

大椽はそれを聞くと、

「ふむ、お前もやつぱりさうかいな。」

と言つて感心したやうに二三度首をふつた。大椽の言葉によると、彼も長い間幾度かこの九

つ目を語つたが、戸無瀬も本藏もどうかすると喧嘩腰で、ぶつきらぼうになりがちなので、いつだつたか越路と同じやうな事を言つて、師匠の春太夫に訊いた事があつた。春太夫は弟子の顔を見て、唯にやにや笑つてのみゐた。

大椽はその後工夫に工夫を積んでみたが、やつと七十七歳の春になつて、初めて師匠春太夫のそれに比べて餘り聽き劣りのしない語り口に達する事が出來た。

「つまり稽古だな。稽古よりほかには何も無い。」

大椽はその昔春太夫がしたやうな笑ひを繰返した。

だが、じつさいは稽古ばかりではない。稽古のほかに「人生」といふものを知らねばならない。越路も九つ目が立派に語れるやうになつたのは、大分「人生」がわかつて來た證據である。

帽子

栗は毬かぶを脱ぬぎ、人は新しい帽子を被らなければならぬ時節になつて來た。今日は一つ帽子の話をする。

ミラボーといへば、佛蘭西革命の大立者であつたことは、少しでも政治に興味を持つ者の（政治といふものは、ほんの少し興味をもてばそれで十分だ。）誰しも知つてゐる事だ。このミラボーは生れつき非常な醜男みにとこで、肉身の親父までが、何かの拍子には、

「ガブリエル、お前の顔はまるで悪魔のやうだな。」

と言ひ言ひしたといふ程だから、鼻がどんなに拉ひげてゐたか知らぬは大抵察しられる。

神様のなかにも、葛城の神のやうに怖しく醜い顔をしてゐたのがあるくらゐだから、人間や狗ころにみつともないのがあつたからといつて、別段物言ひの種にはならないが、困つた

事には、醜い面つきをした者は、どうかすると心までが僻ひんで來る。

尤もミラボーだけは、そんな氣の弱い性ではなかつた。顔の醜いのは打つて變つて、頭のなかには美しいものをたんと持つてゐたから、そんな心配はなかつたのだ。

ミラボーが子供の時、ある貴族の運動會へ出掛けて行つて、何メートルかの徒歩競走に第一着を取つた事があつた。競走は懸賞附であつた。早稻田の坪内逍遙博士の説によると、子供の運動に賞品をつけるのは道徳的によくないといふ事だ。子供は唯もう手足を動かしたいから運動に出るので、それに賞品が附くといふ事になると、子供心にも慾が手傳つて來て、終ひには何をするにも打算的になる虞があるといふのだ。まことに結構な考へだが、その佛蘭西の貴族は、運動會を開くのにも前もつて坪内博士に相談しなかつたものだから、つい賞品を出すやうな手拔かりが出來たのだ。

賞品は帽子であつた。ミラボーはそれを受取つたが、自分の頭に被つてゐるのは賞品のよりもずつと上等のしやれた帽子であつた。ミラボーはその上等の帽子を脱いで側わにゐる禿頭の爺さんに呉れてやつた。

「お爺さん、これをあげよう。僕には頭は一つしきや無いんだから、帽子が二つあつたつて仕方がない。」

かう言つて、彼は賞品の帽子をすつぽりと被つた。

坪内博士も安心して貰ひたい。貰ひ手がミラボーだけに、賞品も別に悪くはなかつたやうだ。だが、九歳の子供の帽子を貰つたお爺さんが、その帽子をどうしたかは私も知らない。

無識の得

平民に腹の空く時があるやうに大名にも咽喉の渴く事がある。話は古いが、むかし備前少將光政が咽喉が渴いた事があつた。丁度秋も末で、窓の外にはちんちろりんが意氣な小唄を歌つてゐる頃であつた。

光政は二三日前鷹狩に出掛けた折、途中で食つた蜜柑の事を思ひ出した。光政は繡眼めじろのや

うに口を窄めて、立て續けに三つばかり食つたやうに思つた。蜜柑は三つともうまかつた。

一體が氣儘育ちだけに、それを思ひ出すと、もう矢も楯も堪らなくなつて、小姓を呼んだ。「蜜柑が食べたくなつた。二つ三つ持つて參れ。」

暫くすると、大顆おほつぶのうまさうなのが籠に盛つて持ち出された。光政は子供のやうに手を出してその一つを取つた。するとその折襖の陰から侍醫の皺くちやな顔がひよつくり見えた。

「御前様、蜜柑をとの御意ださうに承りましたが、この頃の夜寒に如何ぞござりませうな。」侍醫はびくびくもので言つて、圓い滑すべ々した頭を下げた。

「うむ。」

光政はじつと侍醫の顔を見詰めてゐたが、暫くすると手にした蜜柑をそつと籠のなかへ返した。

その夜光政は寢床に入ると、誰に言ふともなし、獨言を言つて溜息をついた。「ああ、危かつた、危かつた。」

側に居た女が聞き咎めて理由を訊くと、光政は宵の間にあつた蜜柑の話をして、あの折自

分が、そのくらゐの事だつたら此方も知つてゐるとでも言はうものなら、今後は誰一人間違つた事を咎め立てして呉れるものも無くなるだらう。

「ほんたうに危いところだつた。」

と言つて、また一つ深い溜息を吐いた。

人の上に立つて、多くの部下を統べてゐる者は、かうして他人の忠言を黙つて聞くだけの心掛けがなくてはならぬ。だが都合好い事には、今時の上役は、

「蜜柑はお毒ですよ。」

と言はれて、「そんな事だつたら此方も知つてるよ。」と口を返すだけの物識りでない事だ。すべて物を識らないといふ事は何かにつけて便利が多い。

若 芽 薑

水野越前守といふと、ちよつと寺内伯に似たところのあるらしい男だつた。この男の頭から出た所謂天保の大改革が、怖しい無理押付であつたのは、今だに老人の一つ話に残つてゐる事だが、その慌しい没落について一條の小説めいた話がある。

時の將軍家慶公は、前の大御所家齋が女が好きだつたのと違つて、若芽薑わかめがが何よりも好物であつた。若芽薑といへば、どんな場末の安料理にも添はつてゐるものだ。將軍家がそんな物まで食べなくともよかつたかも知れないが、實を言ふと、將軍家などといふものは、さうした料理のつまとか、ほんのちよつとした洒落とかいつたやうなものに、ひどく惚れ込むものなのだ。

で、將軍家の膳部に焼肴をつける時には、いつも若芽薑が添へられる事にきまつてゐた。すると或る日の事、將軍家は、ふと膳部の上に好物の薑が見えないのに氣がついて、不思議さうに給仕の者の顔を見た。

「若芽薑はどういたした。忘れたと見えるな。」

「どう仕りまして。」給仕の者は彈機細工のやうに頭を下げた。「差上げませうにも、まるで

品が手に入りませんので。」

將軍家は齒醫者に齶齒の療治でもして貰ふ折のやうに、箸を手持つたままぼかんと口をあけてゐた。

「手に入らないつて、たかがお前若芽薑ぢやないか。」

給仕は顫へながら理由を話した。それによると何月何日のお布令に、自今若芽薑一切禁止といふ事があつたので、それ以來百姓が唯の一本も作らなくなつたといふことだつた。

將軍家は箸を唾へたままじつと考へ込んでゐたが、暫くすると、

「いつぞや越前が、早生はやなりの果物などは奢侈の沙汰だといふので、差止めたやうには思ふが、若芽薑のやうなものまで、布令を出さうとは思ひがけなかつた。」

と言つて、ひどく氣まづい顔をしてゐた。

越前の没落はその後間もなくであつた。若芽薑が齧られなかつたのは、將軍家にとつて何よりも不足だつたに相違ない——。で、内證で世上の夫人方に注意しておくが、物資が高くなつたからといつて、亭主の膳から若芽薑だけは儉約しないやうに願ひたい。多くの場合亭

主は將軍家より一層専制主義者である。

大食俳優

亞米利加の映畫専門の喜劇俳優にアルバックルといふ名高い男がある。恐しく肥つて體量が四十貫の上もあらうといふ大男で、こんな圖體で、罪のない物真似をするのが可笑しいとあつて、觀客に大持てである。

この男が最近に紐育へ行つた時、ふとした出來心で市の衛生講演會へ傍聴に出掛けて行つた。講演會の傍聴といふものは、どこでも大抵出來心から來るものなので、若しかさうでない傍聴者が少しでも居るとしたら、それは皆頭の悪い連中で、聽衆としては頼もしくない輩である。

その衛生講演會の壇上に現れたのは、近頃賣出しの若い衛生學者で、蛋白質と澱粉と含水

炭素と等分に混ぜて、模範的に試験管のなかで拵へたやうな身體をしてゐた。それにしては少し脂肪が足りないやうに思はれたが、時節柄肉の價が高くなつてゐるので無理もないと、喜劇役者は思つた。

衛生學者は自分の口から出る一語一語が、生みたての卵のやうに滋養に富んでるらしい口つきをして喋つた。その説によると、假に人間を七十五歳まで生き延びるものとして、一生の間に食べる食量は自分の體重の千五百倍になる。その中から麵麩だけを取つて、別に積み重ねるとしたら立派なお寺の建物程の容積になる。

一生の間に齧つた野菜を、一纏めに汽車に積み込むとしたら、貨車を三哩ばかり繋ぐねばならぬ事になる。燻肉を一片づつ並べたら、ざつと四哩の長さになる。魚類が千五百貫、鶏卵が先づ一萬二千個といふところ……

聴衆はそれを聞くと、てんでに恥づかしさうに掌でそつと腹を撫でおろしてゐた。鐵面皮な胃の腑は、そんな中でも平氣で呼吸をしてゐた。衛生學者は一段と聲を高めて、
「それから砂糖が千二百貫、鹽が百八十貫、卷煙草が二十五萬本……」

ここまで喋つて來ると、喜劇役者はだしぬけにぼろぼろ涙を流して泣き出した。
「どうした、氣分でも悪いのか。」

つれの男が心配さうに訊くと、喜劇役者は手で押へつけるやうな眞似をして、
「いや、心配せんでもいい。」とあわてて水涕みづはたと一緒に涙を拭いた。「どうもたいした食物だね。それだけの食物を割引してもらはないで、食つてしまつたかと思ふと、つい悲しくなつた。」

生 食

トルストイが菜食論者だつたのは名高い話だ。尤もトルストイ嫌ひな男に言はせると、彼はいつも夜になると、こつそりと臺所へ出て來て、肉皿をつついたといふが、そんな事は神様にでも訊かない限り嘘だか本當だか判らない。

女優のサラ・ベルナル、平和論者のラ・フォレット、彫塑家のロダン、作家のバナアド・シヨオ、それから今一人支那の伍廷芳——といったやうな人達は、揃ひも揃つて皆菜食主義者である。菜食主義者だといへば、文字通りに肉を食べないで、穀物や野菜ばかりで腹を拵へてゐる人達の事である。

菜食主義者の説によると、かうした人達が偉くなつたのは、平素血の滴るやうな獣の肉を齧らないで、清淨な菜食をするからださうだが、それに反対する肉食論者はまた、

「そんな筈があるものぢやない。物は試した。一月でいいからサラ・ベルナルに柔かい雞を、シヨオに羊の肉でも食べさせてみるがいい。二人とももつと氣の利いた事をするやうになる。」

と言つて艸ちまきになつてゐる。

先日亡くなつた米國の小説家ジャック・ロンドンは、肉食論者にもう一步を進めて、凡ての魚類を生そのまま食べようとした男だ。

「牡蠣や蛤を生で食ふ事があるのを思ふと、どんな魚だつて生きたのが食べられないつて法

は無さ。」

と言つて、平氣でかますや烏賊を生そのまま頬張つてゐた。

小包の紐

新しい學校出の人達が、吾勝ちに就職口を探してゐるといふ噂を聞くから、カアネエギイ、の事務員選擇の方法を紹介する。

カアネエギイは木片のやうな事務員でも、大抵は自分がぢかに會つた上で選好えりこみをする。凡てカアネエギイのやうに、自分の腕一本で事業に成功した男は、えて自分の腕を自負する餘り、十二分に自分の鑑定を信じたがるものなのだ。

ある若い學校出の青年が、二人一緒にカアネエギイの事務所に就職を頼みに出て來た。それを聞いた主人は、先づそのうちの一人を應接間に喚び出した。青年は怖る怖る卓子の前に

立つた。

百萬長者はじつと青年の顔を見つめてゐたが、暫くすると立ち上つて後の棚から一つの小包を取出して來た。

「これを解いて呉れ給へ。」

どんな難しい事を問ひかけられるだらうかと、胸をどきどきさせてゐた青年は、やつと安心したやうに、綺麗に櫛の目の立つた頭を二三度下げた。そして叮嚀に小包の括り紐を切つて、紙包を解いた。なかから出たのは、世界を固麵麩のやうに水氣の無い物にしたがつてゐる或る宗教家の書物だつたが、青年は書物の標題などには頓着なく、克明に括り紐を繼ぎ合せて、カアネギイの前に差出した。

その青年と入れ違ひに今一人の男が喚び出された。そして同じやうに小包を配がはれた。その男は小包を見ると、鳶が鼠を扱ふやうに、いきなり括り紐をぶつとりと引切り、紙包を破つて中から一冊の書物を引出した。そして括り紐と包み紙とは一緒くたに丸めて紙屑籠に放り込んだ。

それを見てゐたカアネギイは初めて氣に入つたやうに頷いた。そして一語一語金貨の音のするやうな聲で、

「明日から出て來なさい、事務員に採用するから。」

と言つて笑顔を見せたが、前の青年はそのまま不採用になつた。

ある人がその理由を訊くと、カアネギイは氣もない調子で答へた。

「今日はもう小包のしで紐を節儉するやうな時勢ぢやありませんからな。」

四 國 猿

弘法大師を産んだ四國の土は、今一つ宗教家にも劣らない立派な職業者を生んでゐる。それは尻尾のある猿きちである。

猿廻しが、色々の藝を教へ込むには、一番四國猿が記憶がすぐれてゐて都合がいいといふ

事だ。この一事は、四國出身の人達は何をおいても忘れてはならない郷土自慢のよい材料である。

四國の獵師が猿を捕へるには、樞仕掛くわじかけのちよつとした戸棚を山の中に擔ぎ込み、猿が數多く集まつて來ると、獵師が自分で戸棚のなかへ潜り込み、ぴしやりと扉を閉ぢる眞似をしてみせる。幾度かこれを繰返した後、猿が好きさうな食物をなかに入れておくのだ。

獵師の姿が見えなくなると、猿はにこにこもので、直ぐ戸棚に入つて來る。そしてそのまま生捕られる事になるのだ。

尤も猿のなかでも、少し薄鈍なのは餌を食べると直ぐ遁げ出すので、滅多に捕へられる事はないが、智慧自慢のこゝかし小慧いのに限つて、獵師の眞似をして戸棚に入ると、いきなり扉を閉ぢてしまふので、また出られなくなつてしまふ。

智慧自慢の輩に限つて自分から生捕られる——これは何も猿に限つた事ではない。

光琳の羽織

むかし尾形光琳と、三井家の主人八郎右衛門とが連れ立つて、賀茂の葵祭を見に出掛けた事があつた。いつの時代でも富豪といふものは、土藏へ入る時の外は秀れた藝術家と道連れになるのが好きなものだ。といつて、途々藝術の話をするといふでもないが、唯相手がもつてないお寶がうんと自分の懐中にある事だけで、面白くてたまらないのだ。

節儉家の八郎右衛門は、その日もちよつとした外出着しか着てゐなかつたが、光琳は風流な金更紗きんさらの羽織をはおつて澄ましてゐた。二人は葵橋の袂に立つて祭の行列を待つてゐた。

八郎右衛門は、さういふうちにもじつと光琳の羽織に見惚れて、
「ええ出來や、描き更紗もこんなのは滅多にあらへん。畫家の爺さんに被せるのは勿體ないやうなもんやな。」